Ⅳ　医学部看護学科

1　教育・研究の理念・目標等

1. 教育・研究の理念と目標

近年の医療・福祉を取り巻く環境の変化に対応し，多様な社会的要請に応えるため，21 世紀の医療に向けて，豊かな感性と人間性を備え，日々進歩する知識や技術を修得・発展させる能力や，地域に即した保健医療活動の中心的役割を果たすことのできる資質の高い看護職を育成することを目的に以下のディプロマポリシーを設定している。

① 人権と生命の尊厳に対する敬愛，豊かな感性と倫理観の修得
② 総合的・全人的に人間を理解する能力
③ 自主性と創造力を持ち，主体的に判断・実践ができる問題解決能力
④ 看護専門職として，科学的知識・技術を修得し，それを探求していくことができる能力
⑤ 看護の役割を認識し，ケアチームの一員として活躍できる能力
⑥ 国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力

2. 教育・研究の活性化と充実の経過

急速な少子・高齢化による人口構成の変化，疾病構造の変化，また人々の健康への関心の高まりなどにより，医療を取り巻く社会環境は著しく変貌してきている。慢性疾患や老化による障害を抱えて生活する人々が増加するにつれ，療養生活の質，生命の尊厳の本質が改めて問い直されるようになった。このように拡大し複雑化する社会的ニーズに応えていける看護者を育成するには，豊かな感性と深い倫理観に裏付けられた人間性，専門的知識・技術と実践力を備え，問題解決能力，また，国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力を身につけることが課題となる。

このため 1 年次生から医療・看護への関心を高めるため，初期体験実習や総合科目（医療と生命），また，医学概論は医学科学生との合同授業を開講している。また，専門教育の基盤となる教養教育は 1，2 年次に全学部生を対象とした全学共通教育を受講する。

問題解決能力，主体的に学習する能力育成のために 1 年次からテュトーリアル教育に基づいた少人数教育を実施している。また，平成 18 年にカリキュラムを改正し，国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力の育成，看護研究の基礎的能力の充実に向けて『発展看護学』を専門科目の中に配置した。

3. 教育・研究の将来構想

（1）基本理念

わが国における医療・福祉の状況は，近年大きく変化している。医学の進歩と医学を取り巻く諸科学の発展，さらに急速な高齢化などの社会環境の変化に伴い，医療の世界も多様化し，治療とともに援助サービスが重視されるようになってきた。医療における看護の役割は，今後さらに拡大・複雑化していくことは明らかであり，豊かな感性と人間性を備えた資質の高い看護職の育成が不可欠となる。

これらの社会的要請に応えるため，日々進歩する医療の知識・技術に対応し，さらに発展させる能力を持った人材，地域の実情に即したきめ細やかな保健医療活動の中心的役割が果たせる人材を養成

するとともに，看護教育及び研究・研修の拠点となり，生涯学習に貢献することのできる，社会に開かれた看護学科を目指すことを基本理念とする。

(2) 教育体制

21世紀の医療は，治療水準の向上とともに，あらゆる健康レベルの人々を対象とした，保健・医療・福祉が連携した良質できめ細やかな援助サービスが要請される。医療における看護の責任は今後ますます重く，社会の要請に応えるため，次のような人材の育成と学問的基盤の確立を目標とする。

① 全人的医療を担い得る豊かな感性と人間性を備えた人材
② 高度医療の一環を担い得る資質の高い人材
③ 保健・医療活動に指導的役割を果たせる人材
④ 看護学における学問的基盤を確立できる人材
⑤ 広い視野を持ち，国内外で活躍できる人材

医学部医学科との緊密な協力体制を築き，総合大学としてのメリットを充分に生かした教育・研究を行っていく。「健康」を視座にすえた統合カリキュラムで育った問題解決能力や判断能力，応用能力のある人材の育成により，地域で保健医療に係わる人々とともにケアチームを作り，生涯学習を続けていける体制整備を目指す。

(3) 研究体制

看護学の研究は，関連諸科学との連携，特に保健・医療分野との共同研究は必須である。臨床，地域における看護職との研究は看護の研究の本質的意義を有するものであり，各講座，分野の特色の中で推進していく。看護の対象や役割の拡大により，健康支援や生活への援助から，教育・福祉・経済・情報などと連携していく必要性が高まっている。学内外において関連する学問分野，他の専門職との連携を密にし，学際的かつ効率的な共同研究を推進していく。また，大学院修士課程（看護学専攻）を開設したことにより，より高い専門性を追及した教育・研究の充実を図っている。

2　教育活動

1. 学生の受入れ

(1) 学生募集の方法

① 学生募集要項及び入学者選抜に関する要項については，学務部から全学一括で県下高等学校を中心に郵送配布するとともに，希望者に対しては学務第二係から直接又は郵送で配布している。
② 看護学科紹介パンフレット「岐阜大学医学部看護学科案内」を作成し，大学紹介（プチ・オープンキャンパス，オープンキャンパス）参加者に配布している。
③ 大学紹介（プチ・オープンキャンパス，オープンキャンパス）において，看護学科長の概要説明並びに各講座の模擬実習等を実施するとともに，より効果的な紹介とするため，参加者からアンケートをとって看護学科教務厚生委員会における計画立案の参考としている。
④ 看護学科全教員が岐阜県を中心に高等学校を訪問し，看護学科紹介及び進路指導担当の先生と情報交換を実施している。

⑤　私塾主催の入試説明会に教員を派遣することや，高等学校に対する「出前講義」を行うなど，積極的に取り組んでいる。

(2) 入学者選抜の方法と方針

人を愛し生命を尊び，全ての人々の健康の向上に寄与する看護職を育成するために以下のようなアドミッションポリシーを設定し，学生を求めている。

①　看護への関心があり，看護学の修得に必要，かつ，十分な基礎的学力を有すること。
②　様々な現象に対して，あらゆる角度から観て考え，真実を知ろうという科学的探求心に富み，自己学習意欲が旺盛であること。
③　他者の意見を傾聴し，その気持ちを理解できるように努め，自己の意見を表現できる能力を持っていること。
④　自己の役割を認識し，責任感を持っていること。
⑤　自己の心身の健康に留意し行動できる力を持っていること。

【３年次編入】

すでに看護に関する学科又は課程において学習してきた学生を対象に，より高度な看護実践能力と幅広い教養と豊かな人間性を身につけようとすることに強い意欲を有する者を求めている。

上記のような看護学生として望ましい学生を入学させることに加え，応募者数の増加を目的に入試科目の見直しを実施した。このことによって，平成 18 年度募集からは文系からも理系からも受験しやすいように，科目を選択できる方法に変更した。

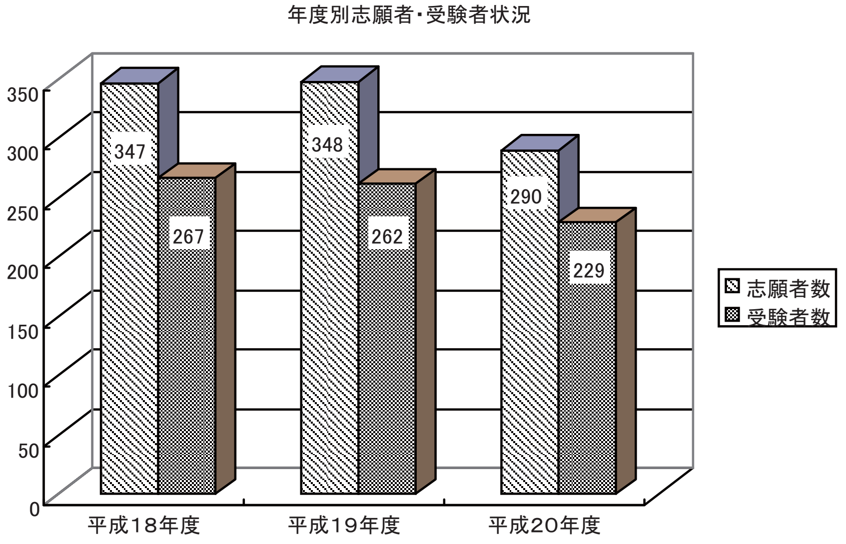
また，入試方法と在校生の成績との関係については，部分的な検討は実施しているが全体的な検討をさらに行う予定である。

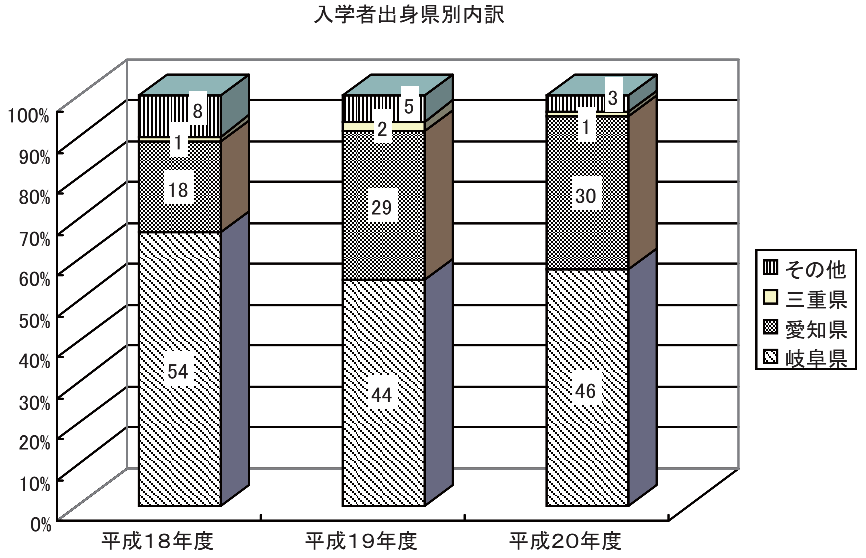
3 年次編入学試験については毎年 10 名を受け入れている。

(3) 学生の受入れ状況

学生定員充足状況：平成 18 年度から 20 年度までの 3 年間の入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。

区分		志願者数	受験者数	入学者	県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
平成 18 年度	男	23	19	4	3	1	0	0
	女	324	248	77	51	17	1	8
	計	347	267	81	54	18	1	8
平成 19 年度	男	39	29	5	4	0	0	1
	女	309	233	75	40	29	2	4
	計	348	262	80	44	29	2	5
平成 20 年度	男	16	14	5	3	2	0	0
	女	274	215	75	43	28	1	3
	計	290	229	80	46	30	1	3





（4）編入学制度と実態

看護学科では，すでに看護に関する学科あるいは課程において学習してきた学生を対象に，編入学（第 3 年次）による学生の受け入れ制度を設けている。

平成 18 年度～平成 20 年度の編入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。

区分		志願者数	受験者数	入学者
平成 18 年度	男	1	1	0
	女	52	47	10
	計	53	48	10
平成 19 年度	男	3	2	1
	女	50	41	9
	計	53	43	10

区分		志願者数	受験者数	入学者
平成 20 年度	男	2	2	0
	女	57	48	9
	計	59	50	9

(5) 研究生の受入れと実態

学則において研究生の受け入れ制度を設けている。

平成 16 年度にブラジルから県費の研究生１名を受け入れた。

2. カリキュラム

看護職の基礎的能力と，科学的思考に裏づけられた看護実践能力，保健・医療・福祉全般にわたる広い見識，そして幅広い教養と豊かな人間性を養うことを目的として，教養教育と専門教育（基礎科目と専門科目）を開講している。

(1) カリキュラムの特徴

① 教養科目は，全学共通教育科目として開講

個別科目（人文科学系，社会科学系，自然科学系，スポーツ・健康科学系），総合科目，外国語科目や自由選択科目が開講され，必要単位を考慮しながら，これらの科目から自分の学びたい科目を選択する。

② 地域科学部・教育学部の科目の受講

基礎科目には看護独自の科目の他に，地域科学部や教育学部が開講する科目があり，それぞれの学部の学生と一緒に学ぶ。

③ 医学部との合同講義（医学概論）

全人的医療や医療職種の役割などに関して学ぶ。

④ 実習や体験に基づいた学習の重視

専門科目は，講義だけでなく体験を踏まえた学習を実施する。

(2) カリキュラムの構築

① 看護実践能力の育成を目指してカリキュラムの構築

・看護学士課程教育は，文部科学省の見解に依れば，看護の実務家の育成が目的であると述べられている。看護学教育内容ガイドラインとして２００４年に「看護実践能力育成に向けた大学卒業時の到達目標」が示された。これには看護実践能力の５つの構成要素・１９項目・７６細項目に準拠した項目が上げられている。岐阜大学医学部看護学科では，示された看護実践能力が修得できるように教育内容を各講座間で有機的に関連させながら，看護専門教育を４年一貫教育として実施するようにカリキュラムを構築している。

・１年次生から４年次生までの間に，看護学実習（初期体験実習，基礎看護学実習，急性期看護学実習，慢性期看護学実習，老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ，精神看護学実習，小児看護学実習，母性看護学実習，在宅看護学実習，地域看護学実習，統合実習）を通じて看護の計画的な展開能力，特定の健康問題をもつ対象への実践能力，ケアチームの一員として活躍できる基礎的な能力が修得できるように実習を配置している。

② 国家試験受験資格が取得できるカリキュラム構築

１年次生から４年次生までの間に，共通教育及び専門教育の各教科目を学習し，４年次学年末

に実施される看護師国家試験・保健師国家試験の受験要件を満たす充分な科目と単位数に配慮したカリキュラムを構築している。また助産に関しては，選択科目として助産師国家試験の受験要件を満たすカリキュラムを構築している。

③ チュートーリアル教育を取れ入れたカリキュラムを構築
入学当初から社会や医療の変化に伴い生起する多様で複雑な健康問題に対して看護職として自ら課題を探求，その課題の解決に向けて学習できる能力の獲得を目指してチュトーリアル教育を取り入れたカリキュラム構築をしている。

④ 発展科目として，看護学専門科目の一部として位置づけ，看護実践能力育成に向けて学習する機会を設けること，さらに，科学的思考の修得と将来への発展を期待して，研究方法の講義及び卒業研究の実際を通して，基礎的能力の修得を行うように位置づけている。

（3）課題と展望

厚生労働省が保健師教育・助産師教育・看護師教育における看護基礎教育における技術項目の卒業時の到達度を明示した。これらを受けて岐阜大学医学部看護学科のカリキュラムも，少子高齢化の進展，医療技術の進歩，国民の意識の変化，看護教育水準の向上など時代の要請に応えて，教育内容，教授方法について検討をし，平成21年度から新しいカリキュラムを実施する予定でいる。

また，看護学科においては，保健師と看護師との2つの教育課程に加え，選択ではあるが助産師の授業科目もあり，卒業には非常に多くの取得単位数を必要としているといった問題がある。全国的には少数であるが，助産師教育を大学院修士課程，専門職大学院，大学の専攻科などで行う大学も出てきている。本看護学科においても，助産師の授業科目に関して，教育上望ましい位置づけを，現在検討している。

3. 教育方針

（1）教育改革

看護学科では，平成18年度にカリキュラム改正を行った。カリキュラム改正にあたっては，4年間の教育実績を踏まえ以下の改正を行った。①看護学の基礎的教育を基に将来を見据えた専門分野を発展的に学習する目的で「発展看護学」を設置した。この発展看護学は，研究方法論，卒業研究，国際看護事情などの授業科目で構成した。②従来の専門科目を見直し，不足する授業科目を新設し，専門科目の充実を図った。③教養科目の充実のために，取得単位数を増加した。

また，平成21年度から指定規則の変更に基づいた改正カリキュラムをスタートさせる。さらには，平成22年度からは地域科学部・応用生物学・工学部・看護学科の協同で養護教諭課程を開講する予定である。

（2）全学共通教育

大学では，専門について深く学ぶとともに，教養を学ぶことが必要である。この目的を達成するため，4年一貫教育体制のもとに，教養教育と専門教育を並行して行っている。教養科目については，全学体制のもとに全学共通教育として進められている。

○全学共通教育の最低修得単位数

科　目　区　分		卒業要件修得単位数	
個別科目		14 単位以上	人文科学系　6 単位以上 社会科学系　4 単位以上 自然科学系　2 単位以上 スポーツ・健康科学系　2 単位以上
総合科目		4 単位以上	
外国語科目	既修外国語系（必修）	4 単位以上	
外国語科目	未修外国語系（必修）	2 単位以上	
外国語科目	既修外国語系（選択必修）	2 単位以上	
外国語科目	未修外国語系（選択必修）		
自由選択科目		2 単位以上	
学部開講	セミナー	2 単位以上	
合　計		30 単位	

○全学共通教育の開講時間枠

1 年次前学期

曜日　時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

1 年次後学期

曜日　時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

◎　：全学共通教育の開講時間枠

空白：専門教育の開講枠

(3) 専門教育（テュトーリアル教育・臨床実習）

① テュトーリアル教育

専門教育の 3 講座で 1 グループ 8 ～ 10 人の 8 ～ 10 グループでテュトーリアル教育を実施している。

基礎看護学では，「生活行動から見る身体」を 1 年次後期，成人・老年看護学では 2007 年度までは「成人・老年事例展開」を 2 年次後期・3 年次前期に，2008 年度からは 3 年次前期に授業科目ごとに提示された事例について主体的に学習を進めている。地域・精神看護学では「地域における健康問題と援助Ⅰ」を 2 年次後期に，「地域における健康問題と援助Ⅱ」を 4 年次前期に開講予定である。特に「地域における健康問題と援助Ⅱ」は，地域看護学実習における地域診断を中心に捉え，実践とチュートリアル学習とを連携した学習ができるように配置した。看護学科は，平成 15 年 3 月に総合研究棟が完成し，セミナー室が確保されたことから学習環境が整備されつつあるが，教材や図書，コンピュータなどの充実が今後の課題である。

② 看護学臨地実習

必修科目である臨地実習（25 単位）は，卒業要件単位数（133 単位以上）のうち 20% 弱を占める非常に重要な専門教育科目であり，看護師・保健師養成には欠かせないものである。そのため，学生の基礎科目や専門科目の学習進度に合わせ，１年次の初期体験実習による動機付け，２年生の基礎看護学実習における患者のニード把握と看護過程の理解，３年次から４年次にかけての分野別実習における看護過程の展開の学習というように構成してきた。臨地実習に関わる委員

会として実習委員会があり，次世代の看護を担う能力を持った人材を育成するために以下の活動を行ってきた。

・ 臨地実習施設との調整と臨地実習指導者会議の企画および開催
・ 年度ごとの臨地実習計画表の作成
・ 臨地実習要項の作成と配布
・ 臨地実習ガイダンスの企画と運営
・ 臨地実習中における災害発生時対処マニュアルの作成
・ HB 感染症と小児感染症の抗体検査と検査結果の管理体制の確立
・ HB 感染症と小児感染症ワクチン接種の勧奨
・ 学生を対象とした感染予防対策に関する特別講義の開催
・ 患者および学生の個人情報保護に関する実習記録等取り扱いマニュアルの作成
・ 臨地実習に伴う予算に関する検討

平成 19 年からは，冬期のインフルエンザの流行によって臨地実習に障害がでないようにインフルエンザワクチンの接種勧奨だけでなく，3 年生と 4 年生の希望学生を募り，医学科の学生との集団接種に関わっている。

地域看護学と母性看護学，助産学の実習は，受け入れ施設の固定化が難しく，施設の変更が多いことが問題点としてあげられるが，他の分野では附属病院以外の施設に関してほぼ安定してきており，施設における指導体制の安定化によって実習における学習効果を高めていくことが可能になってきた。今後，実習指導に関わる教員のさらなる指導能力の向上，実習施設との連携の充実を図ることによって，ディプロマポリシーに合った学生をより多く育成していくことが課題である。

(4) 他大学における授業科目の履修方針と状況

学則第 59 条の規定「教育上有益と認めるときは，他の大学又は短期大学との協議に基づき，学生に当該他大学等の授業科目を履修させることができる。」とあるが，専門科目についての実績はない。

(5) 在籍，留年，休学，退学の状況

過去 2 年間の状況は次表のとおりである。

区　分	在　籍	留　年	休　学	退学（除籍を含む。）
平成 18 年度	341	8	3	2
平成 19 年度	346	3	3	4

(6) 教育施設・設備の現状

区　分	面　積	用　途	設　備
本館 1 階　講義室 1	134 ㎡	講　義	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
本館 3 階　講義室 2	105 ㎡	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
本館 3 階　講義室 3	111 ㎡	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
本館 4 階　講義室 4	90 ㎡	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置

区　　　　分	面　積	用　　　　途	設　　　　備
本館5階　講義室5	68㎡	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置
新棟1階　セミナー室	第1～第9室 26㎡～47㎡	テュトーリアル教育 初期体験実習	パソコン，プリンター，スキャナー，書棚（授業用専門書）
新棟3階　大学院講義室2・3	2室 23㎡～24㎡	講　　義	
新棟3階　大学院生研究室	2室 23㎡～24㎡	研　　究	
本館2階　基礎看護実習室1	258㎡	基礎看護実習	ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置，ガス乾燥機
本館2階　老年在宅実習室	92㎡	老年在宅実習	バリアフリーモデルルーム
新棟2階　成人看護実習室1	23㎡	成人看護実習	
新棟2階　成人看護実習室2	106㎡	成人看護実習	ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
新棟2階　成人看護実習室3	26㎡	成人看護実習	書棚
新棟2階　基礎看護実習室2	47㎡	基礎看護実習	ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
新棟3階　地域看護実習室	94㎡	地域看護実習	
新棟3階　精神看護実習室1	53㎡	精神看護実習	
新棟3階　精神看護実習室2	26㎡	精神看護実習	
本館4階　理化学実習室	90㎡	理化学実習	保冷庫，フリーザー，遠心分離機，サーマルサイクラー
本館4階　大学院講義室1	90㎡	講　　義	
新棟4階　母性・小児看護実習室1	147㎡	母性・小児看護実習	沐浴槽，乾燥機
新棟4階　母性・小児看護実習室2	26㎡	母性・小児看護実習	
新棟4階　助産学実習室 新棟4階　母性・小児看護実験室1	93㎡	助産学実習 母性・小児看護実習	沐浴槽 ＩＨクッキングヒーター

(7) 成績の評価，認定の基準

成績は，試験等の結果を総合して以下の区分で評価する。

優（100点～80点）合格

良（79点～70点）合格

可（69点～60点）合格

不可（60点未満）不合格

病気その他正当な理由により定期試験を受けられなかった者について，願い出により追試験を受けることができる。定期試験及び追試験に不合格となった者について，1回に限り再試験を受けることができる。

（8）看護師等国家試験合格状況

過去２年間の合格状況は次表のとおりである。

区分		受験者	合格者	合格率	全国合格率
平成18年度	保健師	83	83	100	99.0
	助産師	7	6	85.7	94.3
	看護師	73	73	100	90.6
平成19年度	保健師	89	87	97.8	91.1
	助産師	8	8	100	98.1
	看護師	79	18	98.7	90.3

（9）学生の就職状況

過去２年間の卒業生の就職状況は次表のとおりである。

区分	看護師	保健師	助産師	進学	その他
平成18年度	62	13	7	1	0
平成19年度	57	18	8	2	2

4. 学生生活への配慮

（1）奨学金の種類と採択状況

過去２年間のデータは次表のとおりである。

区　　分	日本学生支援機構				その他の奨学金	
	第１種		きぼう21			
	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数
平成18年度	18	17	14	14	1	1
平成19年度	16	15	17	15	0	0

（2）授業料の免除の状況

過去２年間の状況は次表のとおりである。

区　分	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成18年度	341	29	0	24	35	1	28
平成19年度	346	40	17	17	37	18	18

（3）学生生活相談の体制と実態

学生の個人的な生活に関する相談については，学務第二係が窓口として対応している。

個人的相談については定められた担当教員が応じ，講座レベルでの指導事項などについては当該講座の教員により対応し，総合的には看護学科教務厚生委員会において対応している。

(4) 課外活動の実態

看護学科で許可している学生団体は存在しないが，岐阜大学大学教育委員会の認める体育系及び文科系サークル，また岐阜大学医学部教務厚生委員会の認める医学部体育系及び文科系サークルに所属し活動する学生は少なくない。

キャンパスライフが有意義で，健全なものとなるように課外活動を行う学生数の実態は次表のとおりで学年進行とともに増加している。

区　分	全学サークル		医学部サークル	
	体育系	文化系	体育系	文化系
平成18年度	33	24	46（8）	23
平成19年度	37	20	20（7）	10

※　1　各年度の4月1日付けの部員数であり，新入部員数は含まない。
　　2　（　）内は，奥穂高岳診療所クラブ部員数（外数）で，7月時点での部員数である。

5. 研究活動

〔基礎看護学講座〕

(1) 基礎看護学分野

1. 研究の概要

基礎看護学分野では，看護基礎教育と看護継続教育との関連性の中で，その歴史的背景をふまえつつ，看護師に必要な援助技術に関する研究，看護観や倫理観に関する研究を行っている。また，現代の社会状況に合わせ感染管理を含む看護管理に関する研究に取り組んでいる。

1) 看護職の継続教育に関する歴史的研究を継続して行っている。
2) 在宅における感染管理に関する教育プログラムの効果検証と在宅ターミナルに関する教育プログラムの開発をテーマに研究に取り組んでいる。
3) 看護管理や医療経済的な視点を含めた看護師の資質向上にむけてのキャリアアップに関する研究を行っている。
4) 看護師の離職に焦点を当て離職に影響を与える要因の追究，看護師が職場での職務継続使用とする時の意志決定に影響する要因を明らかにすることに取り組んでいる。
5) ナイチンゲールに関する看護および看護観・倫理観・道徳観・宗教観を含めた人物の研究，並びに看護の総論等の研究を行っている。
6) 英文学ではヴィクトリア朝時代を中心に Charles Dickens, Thomas Hardy, Jane Austen, E.M. Forster 等の作品研究を行っている。
7) 看護師の倫理的感受性に関する研究を行っている。
8) 患者の権利擁護に関する研究をそれぞれの教員が中心となって継続して行っている。
9) 看護技術教育に関し，特に栄養に関する援助技術に関しての研究を行っている。

2. 名簿

教授：	滝内　隆子	Takako Takiuti
教授：	塚原　節子	Setsuko Tukahara
准教授：	瀬戸崎康子	Yasuko Setozaki
准教授：	小松　妙子	Taeko Komatsu
准教授：	足立みゆき	Miyuki Adati
助教：	岡本　千尋	Chihiro Okamoto
助教：	蛭田　美貴	Miki Hiruta

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1) 坂本玄子，滝内隆子他．病家須知　翻刻訳注篇上，農文協，2006 年.
2) 坂本玄子，滝内隆子他．病家須知　翻刻訳注篇下，農文協，2006 年.
3) 坂本玄子，滝内隆子他．病家須知　研究資料篇，農文協，2006 年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

1) 大津廣子．看護技術の熟練とインセンティブ，日本看護医療学会誌，2006 年；8 巻：44－51.
2) 中川真帆，滝内隆子，金若美幸．洗髪車を用いた洗髪における生体負担―水平仰臥床と上半身 20° 挙上位の比較―，日本看護技術学会誌，2006 年；5 巻：51－57.
3) 前田修子，滝内隆子，小松妙子．感染管理に関する知識・技術に対する訪問看護従事者の捉え方，日本看護研究学会誌　2006 年；29 巻：103－111.
4) 前田修子，滝内隆子，水島ゆかり．在宅における医療処置に対する医療・衛生材料の確保に関する認識―在宅医療に携わる医師・看護師を対象として―，訪問看護と介護　2006 年；11 巻：593－599.
5) 前田修子，滝内隆子，水島ゆかり．在宅療養者への医療・衛生材料に向けての課題，癌と化学療法　2006 年；33 巻：2733－275.
6) 前田修子，滝内隆子，小松妙子．訪問看護に必要な感染管理を学ぶ　訪問看護師を対象とした感染管理に関する教育の現状－どうすれば学べるの？感染管理－，東京：医学書院　2007 年：450－459.
7) 小松妙子，滝内隆子，前田修子．訪問看護に必要な感染管理を学ぶ　「訪問看護師向け感染管理に関する

教育プログラム」の作成－訪問看護師に必要な知識･技術を効果的に学ぶために－，東京：医学書院　2007年：460－465.

8) 小松妙子，滝内隆子，前田修子．訪問看護に必要な感染管理を学ぶ　訪問看護ステーションで開催する感染管理の研修会－「手洗い・うがい」の学習効果を挙げる準備･工夫－，東京：医学書院　2007 年：466－469.

9) 前田修子，滝内隆子，小松妙子．訪問看護に必要な感染管理を学ぶ　「手洗い・うがい」研修会の実際－訪問看護における「手洗い・うがい」のポイント－，東京：医学書院；2007 年：470－482.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

1) 大津廣子，望月章子，足立みゆき，渡辺亜紀子．看護教員の力量形成に影響を与える要因分析，日本看護医療学会雑誌　2006 年；8 巻：21－30.
2) 滝内隆子．占領期における看護職のリフレッシャーコースに関する研究　―看護教育指導者講習会―，総合政策学会，2007 年；9 巻：83－92.
3) 滝内隆子．占領期における看護職のリフレッシャーコースに関する研究　―補習教育―，総合政策研究学会，2007 年；10 巻：29－40.
4) 小松妙子，滝内隆子，前田修子．訪問看護従事者の感染管理に関する学習の現状と要望，環境感染　2007年；22 巻：41－45.
5) 渡邉亜紀子. 糖尿病を抱える糖尿病患者の思い―教育入院退院後 3 か月と 1 年後の面接から－, PRACTICE 2007 年；324：226－230.
6) 前田修子，滝内隆子，水島ゆかり，中山栄純，浅見美千江．｢在宅における感染管理に関するマニュアル｣の内容に関する評価　―訪問看護師を対象とした調査より―，日本在宅ケア学会誌　2007 年；10 巻：91－98.
7) 前田修子，滝内隆子，小松妙子．訪問看護師の修得状況調査結果から「手洗い・うがい」研修会学習内容･方法の検討，環境感染　2007 年；22 巻：137－143.
8) 尾田　愛，森　幸美，中山詠美，山田美香，塚原節子．癌化学療法を受ける患者が癒されるとき，第 38回日本看護学会論文集(成人看護Ⅱ）2007 年：121－122.
9) 山川雅子，米沢真希子，山田智代，吉岡奈美，堀美栄子，塚原節子．経験年数 3 年未満の看護師の抑制に対する認識，第 38 回日本看護学会論文集（看護総合）　2007 年：303－305.
10) 前田修子，滝内隆子，小松妙子．訪問看護師を対象とした「手洗い・うがい」研修会の効果検証，環境感染　2008 年；23 巻：41－47.
11) 岩城直子，塚原節子．｢看護における社会的スキル」と関連する要因の検討，石川看護雑誌　2008 年；5巻：75－84.
12) 滝内隆子．占領期における看護職の継続教育に関する研究―病院内における再教育―，総合政策学会　総合政策研究　2008 年；10 巻：141－150.
13) 前田修子，滝内隆子，小松妙子．在宅ケアの感染管理に関する研究の動向と今後の課題―1992～2006 年の国内文献から―，環境感染　2008 年；23 巻：350－354.
14) 佐伯久恵，山田美香，高島由美，池田由香，高橋美子，塚原節子．臨床看護師が院外発表を体験したことで抱く研究への思い，第 38 回日本看護学会論文集（看護管理）　2008 年；300－302.

原著（欧文）

1) Yasuko Setozaki. The Light Side of *A Tale of Two Cities*. Journal of Humanities, Language & Culture & Literature. XXVIII. 2007:1-39.

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1) 研究代表者：渡邉亜紀子；文部科学省研究補助金若手研究(B)：糖尿病患者の食事療法に対する葛藤の意味を考慮した看護援助方法に関する研究；平成 16－18 年度；3,300 千円(900：1,000：1,400 千円)
2) 研究代表者：足立みゆき，研究分担者：大津廣子，宮林郁子，渡邉亜紀子；文部科学省研究補助金基盤研究(C)(2)：看護師の倫理的感受性と倫理的意思決定選好要因に関する研究；平成 18－19 年度；3,400 千円(1,200：2,200 千円)
3) 研究代表者：前田修子，研究分担者：滝内隆子，小松妙子：科学研究費基盤研究(C)(2)：「訪問看護師を対象とした感染管理教育プログラム」の実証と再構築に関する研究；平成 19－21 年度；3,864 千円(1,111：1,422：1,331 千円)
4) 研究代表者：村中陽子，研究分担者：足立みゆき；文部科学省研究補助金基盤研究(C)(2)：医療におけるリスク感性を高めるための教材開発；平成 19－22 年度；3,300 千円(1,200：500：1,100：500千円)

5） 研究代表者：小松妙子，研究分担者：滝内隆子，前田修子：科学研究費基盤研究(C)(2)：訪問看護師対象の「在宅ターミナルケア」に関する教育プログラム開発；平成 20－22 年度；3,937 千円(1,097：1,338：1,502 千円)
6） 研究代表者：佐藤公美子，研究分担者：滝内隆子，坪井良子，奥宮暁子：科学研究費基盤研究(C)(2)：占領期の看護管理政策に関する考察―GHQ／SCAP 文書による歴史的分析―；平成 20－22 年度；4,058 千円(1,605：1,483：970 千円)
7） 研究代表者：宮林郁子，研究分担者：日高艶子，宮脇美保子，足立みゆき；文部科学省研究補助金萌芽研究：リーダーシップとデリゲーション能力が大卒看護師の「仕事のやりがい」に及ぼす影響平成 19－20 年度；3,100 千円(2600：500 千円)

2）受託研究

なし

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

小松妙子：

1） 第 39 回平成 20 年度日本看護学会－看護教育－学術集会 学会準備委員会副委員長(平成 19 年度～平成 20 年 9 月)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

滝内隆子：

1） 第 43 回常総国際高度専門職教育研究会学会(平成 20 年 10 月，富山，招待講演「看護教育の現在」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

1） 滝内隆子・他『「病家須知』が「矢数医史学賞」受賞(平成 18 年度)

9. 社会活動

なし

10. 報告書

1） 滝内隆子，前田修子，小松妙子；在宅における感染管理介入と教育プログラムの開発：平成 16 年度－平成 17 年度科学研究費補助金：1－46(2006 年 3 月)
2） 足立みゆき，大津廣子，宮林郁子，渡邉亜紀子：看護師の倫理的感受性の実態調査とその発達プロセスの構造化：平成 17 年度－平成 18 年度科学研究助成金報告書：1－15(2006 年)
3） 大津廣子，大日康史，足立みゆき，渡邉亜紀子：高齢者の医療機関の受診行動と選好要因に関する研究：平成 16 年度－平成 17 年度科学研究費補助金：1－57(2006 年)
4） 渡邉亜紀子：糖尿病患者の食事療法に対する葛藤の意味を考慮した看護援助方法に関する研究：平成 16～18 年度科学研究費補助金(若手研究(B))報告書(2007 年 1 月)
5） 足立みゆき，大津廣子，宮林郁子，渡邉亜紀子：看護師の倫理的感受性の実態調査とその発達プロセスの構造化：文部科学省研究補助金基盤研究(C)(2)報告書(2007 年 3 月)

6） 塚原節子：M-GTA 勉強会を中心とした「質的研究同好会」報告：M-GTA News letter no.29(2008年 6 月)
7） 塚原節子：「アスペルガー障害児の養育とサポートに対する母親の認知的変化に関する質的研究」に対する SV コメント報告：M-GTA News letter no.31(2008 年 9 月)

11. 報道

1） 滝内隆子：看護のルーツを求めて：岐阜新聞(2006 年 1 月 31 日)
2） 塚原節子：外傷性高次脳機能障害が増加：岐阜新聞(2008 年 3 月 24 日)
3） 小松妙子：「感染管理の学習方法」開発:岐阜新聞(2008 年 5 月 27 日)

12. 自己評価

評価

1） 基礎看護分野では看護技術習得のための教育研究に力を入れ，その中での学生の学習意欲につながる教育手法を研究テーマに取り組み，学内での教育と臨地実習での実習指導に一貫性を持たせることができる様努力している。
2） 3 年間での本分野の構成員の異動等で，一定の職場環境，教育活動を高めることに翻弄し，十分な研究活動のできる環境を整えることは充分とは言いきれなかった。
3） 研究活動においては以前からの継続研究を中心に進められてはいるが，新たなフィールドの開拓等に問題もあり成果が得られない状況である。
4） 看護職の継続教育に関する歴史的研究は，占領期に焦点を当て学会発表や論文として成果を出すことができた。また，在宅の感染管理に関する研究は，学会発表や論文以外に，特集として掲載されるなどの成果を出すことができた。今後は在宅ターミナルケアに関する研究の成果も出していく必要がある。
5） 訪問看護師対象の感染管理教育プログラムの効果検証は，研究結果を順次，論文と学会発表により公表できた。ターミナルケアの教育プログラム開発の成果公表に向け，研究促進が必要であろう。
6） 看護師の資質向上に関する研究およびキャリアアップと離職との関連の研究を継続中である。学会発表等では，看護職の離職や，職務継続意志に影響を与える要因の分析等を行ってきたが，論文にまとめるところまでには至っていない。看護職のリスクマネジメント意識について検討中であるが，具体的な方向性が未だ定まっていない状況である。

現状の問題点及びその対応策

1） 研究テーマ以外に，基礎看護学分野として教育内容・方法，教材開発に関する研究を協同で取り組んでいく必要がある。
2） 訪問看護師対象の研究成果は書籍等にまとめ実践に活用できる方向で検討する。
3） カリキュラム改正を受け，基礎看護学分野の教育内容・方法に関する研究も促進する。
4） 英文抄読に対する学生の意識が薄い様に感じられる。卒論や修論には欧文論文の活用を進める必要がある。
5） 看護基礎教育が，看護実践能力に及ぼす影響も鑑み，さらに看護継続教育との関連性も意識しつつ教育方法や教材開発に関する研究に取り組む必要がある。

今後の展望

1） 基礎看護学の教育活動の充実に向けた教育内容，方法，教材開発に関する研究を推進する。
2） 看護管理的視点からの教育プログラムの開発に関する研究を行う。
3） プロジェクトマネジャーの資質向上に向けた教育方法に関する研究を進める。
4） カリキュラム改正の意図を踏まえ，基礎看護学分野の教育内容･方法の充実を図る。

（2）生命機能学分野

1. 研究の概要

本分野では，電子顕微鏡や蛍光顕微鏡に加え，生物物理学，分子生物学の技術を用いて，組織形態から分子のレベルにまで至る研究を行っている。形態レベルの研究では，各種哺乳動物の舌乳頭及び上皮剥離後の結合組織の表面構造を走査型電子顕微鏡により観察し，主に比較解剖学的側面から食物及び咀嚼方法との関係について研究している。一方，分子レベルの研究としては，GFP 融合タンパク質の遺伝子発現により，細胞内における各種タンパク質の挙動を生きた細胞を用いて解析している。さらに，細胞内でのタンパク質間相互作用（結合－解離）について明らかにするために，GFP 変異体を用いた蛍光共鳴エネルギー移動法（FRET）による測定も行っている。本法は多様なタンパク質間相互作用に適用可能であるため，3 次元 FRET の開発や免疫染色への蛍光共鳴エネルギー移動法の応用についても研究している。また，中心体構成タンパク質の遺伝子を同定し，そのタンパク質局在や機能解析を行うことにより，中心体が正確に複製するメカニズムや細胞分裂の制御機構との関連等を研究している。

2. 名簿

教授：	江村正一	Shoichi Emura
教授：	武藤吉徳	Yoshinori Muto

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）

1) 江村正一，Hery Wijayanto，阿閉泰郎．ジャワオオコウモリ舌乳頭の結合織芯の観察，哺乳類科学　2007 年；47 巻：227－230.
2) 江村正一，奥村年彦，陳　華岳．ニホンザル舌乳頭の結合織芯の観察，形態･機能　2007；5 巻：69－73.
3) 江村正一．トビの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察， 医学と生物学　2008 年；152 巻：43－47.
4) 江村正一．フェレットとチョウセンイタチの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察， 医学と生物学　2008 年；152 巻：48－56.
5) 江村正一．キジの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察， 医学と生物学　2008 年；152 巻：129－133.
6) 江村正一．オグロプレーリードッグの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察， 医学と生物学　2008 年；152 巻：134－142.
7) 江村正一．ハクチョウの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察，医学と生物学　2008 年；152 巻：379－385.
8) 江村正一. カピバラの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学　2008 年; 152 巻：386－393.
9) 江村正一．ムササビ舌乳頭の結合織芯の観察， 医学と生物学　2008 年；152 巻：517－522.
10) 江村正一，奥村年彦，陳　華岳．オオタカの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察，解剖学雑誌　2008 年；83 巻：77－80.
11) 江村正一，奥村年彦，陳　華岳．スズメの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察，形態・機能　2008 年；7 巻：7－12.
12) 江村正一, Srihadi Agungpriyono, 阿閉泰郎. ジャワマメジカ舌乳頭の結合織芯の観察, 哺乳類科学　2008 年；48 巻：25－29.
13) 江村正一，奥村年彦，陳　華岳．タヌキおよびハクビシン舌乳頭の結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察， 形態・機能　2008 年；6 巻：75－81.
14) 江村正一．ツミおよびミサゴの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察， 医学と生物学 2008 年；152 巻：523－528.

原著（欧文）

1） Chen H, Emura S, Shoumura S. Ultrastructure of the water-clear cell in the parathyroid gland of SAM6 mice. Tissue Cell. 2006;38:187-192. IF 1.237
2） Chen H, Yao X.F, Emura S, Shoumura S. Morphological changes of skeletal muscle, tendon and periosteum in thesenescence-accelerated mouse(SAMP6):A murine model for senile osteoporosis. Tissue Cell. 2006;38:325-335. IF 1.237
3） Chen H, Shoumura S, Emura S. Bilateral thoracic ducts with coexistent persistent left superior vena cava. Clinical Anatomy. 2006;19;350-353. IF 0.626
4） Emura S, Okumura T, Chen H, Shoumura S. Morphology of the lingual papillae in the raccoon dog and fox. Okajimas Folia Anat Jpn. 2006;19:73-76.
5） Kuwata H, Yoshioka T, Muto Y, Kuwata K, Okano Y. Structural and functional characterization of NP25, a single CH domain protein. Acta Schol Med Univ Gifu. 2006;54:1-7.
6） Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the Japanese marten. Okajimas Folia Anat Jpn. 2007;84:77-82.
7） Yoshimura K, Muto Y, Shimizu M, Matsushima Nishiwaki R, Okuno M, Takano Y, Tsurumi H, Kojima S, Okano Y, Moriwaki H. Phosphorylated retinoid X receptor alpha loses its heterodimeric activity with retinoic acid receptor beta. Cancer Sci. 2007;98:1868-1874. IF 3.165
8） Chen H, Okumura T, Emura S, Shoumura S. Scanning electron microscopic study of the human auditory ossicles. Ann Anat. 2008;190:53-58. IF 0.817
9） Chen H, Shoumura S, Emura S, Bunai Y. Regional variations of vertebral trabecular bone microstructure with age and gender. Osteoporos Int. 2008;19:1473-1483. IF 3.793
10） Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae and their connective tissue cores in the cape hyrax. Okajimas Folia Ana Jpn. 2008;85:29-34.
11） Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the pregrine falcon and common kestrel. Okajimas Folia Anat Jpn. 2008;85:11-15.
12） Emura S, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the owl (Strix uralensis). Anat Histol Embryol. 2008;37:475-478. IF 0.554
13） Muto Y, Yoshioka T, Kimura M, Matsunami M, Saya H, Okano Y. An evolutionarily conserved leucine-rich repeat protein CLERC is a centrosomal protein required for spindle pole integrity. Cell Cycle. 2008;7:2738-2748. IF 3.314

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1） 研究代表者：武藤吉徳，研究分担者：岡野幸雄；岐阜大学活性化経費(研究)：新たに見出した中心体タンパク質 HsVfl1 の機能解析；平成 18 年度；1,200 千円

2）受託研究

なし

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

江村正一：

1） 日本解剖学会評議員(～現在)
2） 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

武藤吉徳：

1） Advances in Planar Lipid Bilayers and Liposomes: Member of Editorial Board (～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究内容は，組織形態から生体分子のレベルまで広範囲に亘るが，分野内の教員間での共同研究は為されていない。また，研究成果は形態及び生体分子レベル共に少数ながら国際的にみても独自の成果が公表されている。しかし，少人数の分野であることもあり，出版数は比較的少ない。

現状の問題点及びその対応策

形態領域（電子顕微鏡）における研究の進行速度は，研究材料としての動物の器官及び組織の確保次第であり，今後これまで以上に全国の動物園及び各自治体の協力を得たいと考えている。一方，中心体タンパク質に関する研究では，当分野で見いだした新規中心体タンパク質 CLERC と相互作用するタンパク質の同定が必須である。このためには，酵母 two-hybrid 法や質量分析法等の利用が有効であり，これらを活用して結合タンパク質の同定を可能にしたい。

今後の展望

電子顕微鏡により野生哺乳動物の舌形態をさらに多く観察し，舌の構造と食性との関係を明らかにしたい。他方，新規中心体タンパク質である CLERC の機能解析を行い，中心体複製や細胞分裂における役割を明らかにしたい。また，遺伝子レベルの研究についても学内の他の研究室との積極的な共同研究を行い，研究成果の奥行きを深める方途を見いだしたい。

〔母子看護学講座〕

（1）母性看護学分野

1. 研究の概要

母性看護・助産学分野においては，ライフサイクルを通じた女性の健康支援に関する研究，周産期ケアに関する研究，および母性看護学教育，助産学教育に関する研究等，研究領域は多岐にわたっている。対象としては母性・女性にとどまらず広く家族・地域を含めた健康支援を考えるものである。

主な研究テーマ；

①二分脊椎女性の月経と性の健康に関する包括的ケアについての研究
②助産実践能力の育成と到達度に関する研究
③思春期の STI 予防に関する研究
④人間工学的手法を用いた母性・助産領域における看護技術や教育方法に関する研究
⑤乳房マッサージ，抱き方・吸着のケアを受けた褥婦の乳汁分泌・自律神経系への効果に関する研究
⑥月経用布ナプキンに関する研究；月経体験および安全性と快適性について，皮膚疾患患者への効用
⑦子育て支援に関する研究
⑧体重管理に焦点をあてた妊婦の身体像についての研究
⑨妊娠・出産の時期と愛着，母親役割行動，夫婦関係に関する研究

2. 名簿

教授：	野田洋子	Yoko Noda
助教：	今田葉子	Yoko Imada
助教：	松野智香子	Chikako Matsuno
助教：	渡邊直子	Naoko Watanabe
助教：	鈴木幸子	Sachiko Suzuki

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1）野田洋子. 第 5 章 女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する健康問題と援助　A 思春期女性への援助：堀内成子編. 助産学講座 5　助産診断・技術学Ⅰ，東京：医学書院；2007 年：192－220.
2）野田洋子. 第Ⅳ章 4 女性と月経：吉沢豊予子，鈴木幸子編. 女性看護学，東京：メヂカルフレンド社；2008 年：170－186.

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）

1）野々山未希子，野田洋子，石川陽子ほか. 性感染症予防におけるコンドーム使用セルフエフィカシースケールの検証，日本性感染症学会誌　2007 年；18 巻：58－63.
2）亀田幸枝，島田啓子，北川真理子，佐藤弘子，高橋弘子，平澤美恵子，野田洋子. 助産師教育におけるコア内容の検討　デルファイ法に準じた認識調査から，看護教育　2007 年；48 巻：442－447.
3）北川眞理子，亀田幸枝，佐藤弘子，島田啓子，高橋弘子，野田洋子，平澤美恵子. 助産師教育におけるコア内容の検討　ミニマム・リクワイアメンツの設定，看護教育　2008 年；49 巻：332－337.

原著（欧文）
なし

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1）研究代表者：野田洋子，研究分担者：足立久子，池谷尚剛，渡部加恵(平成 18－19 年度)，松野智香子(平成 20 年度)，鈴木幸子(平成 20 年度)，研究連携者：小野敏子，笠井由美子；科学研究費補助金

基盤研究(C)：二分脊椎症女性の月経と性の健康に関する包括的ケアプログラムの開発；平成18－20年度；3,840千円(1,500：1,040：1,300千円)

2) 研究代表者：今田葉子；科学研究費補助金若手研究(B)：初学者における沐浴技術の早期習得に関する研究；平成18－20年度；2,000千円(800：1,200千円)(19年度は育児休暇)

2）受託研究

1) 事業実施代表者：平澤美恵子，委員：平澤美恵子，島田啓子，高橋弘子，野田洋子，北川真理子，蔵本直子；文部科学省大学評価研究委託事業：大学における助産実践能力の育成と到達度に関する助産教育評価研究；平成19年度；6,379千円

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

野田洋子：

1) 日本母性衛生学会評議員(～現在)
2) 岐阜県母性衛生学会幹事(～現在)
3) 全国助産師教育協議会理事(～現在)
4) 周産期メンタルヘルス研究会監事(～現在)

今田葉子：

1) 日本人間工学会評議員(平成19年～現在)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

野田洋子：

1) 性の健康医学財団評議員(～現在)

10. 報告書

1) 片平敬子，野田洋子，白石安男，桂きよみ，前澤高子，高橋加恵：女子学生のヘルスリスク行動とリプロダクティブヘルスに関する研究：平成16年度－平成17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)研究報告書(2006年3月)
2) 島田啓子，亀田幸枝，北川真理子，佐藤弘子，高橋弘子，野田洋子，平澤美恵子：助産師教育のコア内容における minimum requirements 項目の例示に関する検討(中間報告)：全国助産師教育協議会平成17年度事業活動報告書：1－17(2006年5月)
3) 島田啓子，亀田幸枝，北川真理子，高橋弘子，野田洋子，平澤美恵子：助産師教育のコア内容とミニマム・リクワイアメンツの例示に関する検討(2006総括報告)：全国助産師教育協議会平成18年度事業活動報告書：1－20(2007年5月)

4) 島田啓子，北川真理子，高橋弘子，野田洋子，平澤美恵子，蔵本直子：助産師教育の改善に向けた在り方検討　コア・コンピテンシーズ修得の基盤：全国助産師教育協議会教育検討委員会　平成19年度事業活動報告書：1－52(2008年5月)
5) 平澤美恵子，島田啓子，高橋弘子，野田洋子，北川真理子，蔵本直子：文部科学省大学評価研究委託事業，平成19年度「大学における助産実践能力の育成と到達度関する助産教育評価研究」報告書：1－66(2008年3月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

母性看護学分野の教員構成は，毎年変化し，平成20年度は新任3名を加えた5名となっている。研究成果としては学会発表が多く，原著論文作成までにいたっていない。外部資金として，科学研究費補助金　基盤研究(C)および若手研究(B)（前任校から）をそれぞれ1件獲得しており，新任教員を含めて分野内で研究を共同して継続できたことは評価される。また全国助産師教育協議会教育県等委員会等における共同研究の成果の助産師教育に果たす役割は評価される。

現状の問題点及びその対応策

教員の移動，定着率の問題から教員の研究成果を原著論文として発表するまでに至らなかったものが多く，次年度に残された課題である。また平成20年度は教授1助教4で母性看護・助産・大学院を担当したことから，教育活動に主眼が置かれ研究活動，論文執筆の時間的余裕がなかったが，次年度からは教員の充足（教授1，准教授1，助教4）により研究環境も若干整えられるものと期待する。

今後の展望

総合大学のメリットを生かした学内での共同研究の可能性の追求，また教育・実践に結びついた実践的研究，国内外の大学・研究機関との学術交流，共同研究の推進を図りたい。外部資金の獲得としては科学研究費にとどまらず，各種団体の研究助成への申請および産学共同研究を積極的に推進したい。可能であるなら若手教員の内地留学，あるいは在外研修への派遣も考慮されるが，まず教員の定着率を上げることが研究の継続に重要と考える。

（2）小児看護学分野

1. 研究の概要

小児看護学分野では，気管支喘息やアトピー性皮膚炎，食物アレルギーなどのアレルギー疾患や，てんかんや先天性心疾患，身体的な障害をもつ子どもと家族の QOL に着目し，特に在宅療養場面における看護職の援助方法に関する研究を行ってきた。研究は岐阜大学内の学部間の連携にとどまらず，名古屋大学，中部大学との共同研究も行ってきた。研究のフィールドも，岐阜大学医学部付属病院の他にもあいち小児保健医療総合センターといった専門病院や個人小児科医院と多岐にわたる。また，在宅療養をする子どもの家庭もフィールドとした。具体的には，重度障害や難病をもつ子どもの親をサポートするための地域支援システムの構築の基礎を固める方向性を明確にしたことの他に，気管支喘息をもつ学童自身が感じる自記式の QOL 調査票を開発して全国調査をおこなった結果から信頼性と妥当性を検証した。今後成果を発表する予定であるが，食物アレルギーの子どもの母親がおかれている現状と負担についても質問紙調査から明らかにしている。さらに，まだ研究成果として発表できる形ではないが，アレルギー疾患などの慢性疾患をもつ学童期の子どもの自己管理に向けた援助についても研究を進めている。また，過去の経験や研究成果をもとにして健康障害をもつ子どもの看護過程を看護学生にも分かりやすい形で執筆した。

その性格上研究という形にすることが困難ではあるが，ツインマザースクラブなどの岐阜県や愛知県で活動する患児の家族会との接点を持ち，集会の企画運営や集会当日のアドバイザーとして実践的な関わりを行う中で，子どもと家族の考え方や行動の変容を捉えてきた。

研究テーマ：

・アレルギーを持つ子どもの QOL 向上に関する看護師の役割
・食物アレルギーをもつ乳幼児の家族への支援
・在宅療養をする小児の地域支援
・行為障害を有するてんかん患児の学校生活指導
・障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化
・障害をもつ双子の育児・介護をする家族への支援

2. 名簿

教授：	杉浦太一	Taichi Sugiura
助教：	佐合真紀	Maki Sago

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1) 桑田弘美．先天的な問題をもつ子どもと家族：市江和子編著．看護系標準教科書　小児看護学，東京：オーム社；2007 年：243−248.
2) 桑田弘美．心身障害のある子どもと家族：市江和子編著．看護系標準教科書　小児看護学，東京：オーム社；2007 年：249−257.
3) 杉浦太一訳．骨髄炎：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：155−160.
4) 杉浦太一訳．骨肉腫と切断術：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：169−176.
5) 杉浦太一訳．糸球体腎炎：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：211−215.
6) 杉浦太一訳．若年性関節リウマチ：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：222−232.
7) 杉浦太一訳．(急性)腎不全：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：264−274.
8) 杉浦太一訳．(慢性)腎不全：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：275−284.
9) 杉浦太一訳．中毒：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：414−417.
10) 杉浦太一訳．乳幼児慢性肺疾患：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：484−491.
11) 杉浦太一訳．尿路感染症：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：492−496.
12) 杉浦太一訳．ネフローゼ症候群：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第 2 版，東京：医学書院；2007 年：507−516.
13) 杉浦太一訳．小児の標準的な血圧測定方法：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，

山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第2版，東京：医学書院；2007年：716－723.

14）杉浦太一訳．ウエストの計算図表：セシリー・L・ベッツ，リンダ・A・サウデン編著．石黒彩子，山田知子監訳．小児看護ハンドブック－病態生理と看護診断　第2版，東京：医学書院；2007年：743－744.

15）杉浦太一．疾患からみた小児看護過程の展開　ネフローゼ症候群：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：338－353.

16）杉浦太一．疾患からみた小児看護過程の展開　急性糸球体腎炎：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：525－536.

17）杉浦太一．疾患からみた小児看護過程の展開　若年性特発性関節炎(若年性関節リウマチ)：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：570－583.

18）杉浦太一．疾患からみた小児看護過程の展開　骨折：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：588－599.

19）佐合真紀．疾患からみた小児看護過程の展開　特発性血小板減少性紫斑病(ITP)：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：308－316.

20）佐合真紀．疾患からみた小児看護過程の展開　髄膜炎：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：384－394.

21）佐合真紀．疾患からみた小児看護過程の展開　アトピー性皮膚炎：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：436－446.

22）桑田弘美．疾患からみた小児看護過程の展開　水頭症：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：167－182.

23）桑田弘美．疾患からみた小児看護過程の展開　脳腫瘍：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：228－246.

24）桑田弘美．疾患からみた小児看護過程の展開　痙攣性疾患：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：359－378.

25）桑田弘美．疾患からみた小児看護過程の展開　脳性麻痺：石黒彩子，浅野みどり編著．発達段階からみた小児看護過程＋病態関連図，東京：医学書院；2008年：542－563.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

1）杉浦太一．小児がん・難治性疾患ケアに必要な視点と家族対応，こどもケア　2008年；2巻：42－49.

2）杉浦太一，佐合真紀．看護ケアのポイント　アレルギー疾患をもつ子どもの食行動，小児看護　2008年；31巻：1103－1108.

3）杉浦太一．特集にあたって　変わらなければならない子どもたちと保護者，そして医療関係者，小児看護　2008年；31巻：1323.

4）宮崎美保，大久保とみ子，杉浦太一．実践的取り組み　気管支喘息で入院している子どもへの援助－入院初期から退院に向けての看護援助－，小児看護　2008年；31巻：1377－1383.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

1）桑田弘美．障害児の在宅ケアにおける家族への支援体制強化に関する調査研究(Ⅲ)－難病や障害を持つ子と家族への支援の方向性－，日本看護学会論文集　地域看護　2006年；36号：132－134.

2）山田知子，浅野みどり，杉浦太一，三浦清世美，石黒彩子．医療従事者との協働に関する思春期喘息児の認識，日本小児看護学会誌　2006年；15巻：68－75.

原著（欧文）

1）Asano M, Sugiura T, Miura K, Torii S, Ishiguro A. Reliability and Validity of the Self-report Quality of Life Questionnaire for Japanese School-aged Children with Asthma (JSCA-QOL v.3). Allergol Int. 2006;55:59-65.

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1）研究代表者：桑田弘美，研究分担者：杉浦太一，後閑容子，野田洋子，石原多佳子，佐合真紀；文部科学省科学研究補助金基盤研究(C)(2)：在宅療養をする小児の地域支援システムの構築に関する研究；平成18－20年度；3,400千円(1,900：700：800千円)

2）研究代表者：杉浦太一；文部科学省科学研究補助金萌芽研究：自己調整理論を用いた外来における気管支喘息をもつ学童への療養行動教育の効果；平成18－20年度；1,100千円(500：400：200千円)

2）受託研究

なし

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

杉浦太一：

1） 日本看護研究学会評議員(平成 19 年 4 月～現在)
2） 日本看護医療学会評議員(平成 20 年 4 月～現在)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

杉浦太一：

1） 第 7 回子どもの療養環境研究会(2006 年 6 月，愛知，シンポジウム「24 時間面会と病院の安全管理」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

桑田弘美：

1） 学校法人城北学園かぐや第二幼稚園評議員(～平成 20 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

1） 杉浦太一：「研究室から大学は今」子どもと家族の健康目指す：岐阜新聞(2008 年 2 月 19 日)

12. 自己評価

評価

平成 20 年（2008 年）の 3 月までは准教授 2 名と助教 1 名からなる教授不在の分野であったが，4 月から教授 1 名，准教授 1 名，助教 1 名から構成される分野となった。しかし，夏には教員の移動があり，現在は，教授 1 名，助教 1 名の 2 名体制で講義，実習指導，研究活動を行っている。先の「現状と課題」で今後の課題とした著書に関しては，教員 3 名ともに著書の分担執筆を行うことができた。最終的な成果発表はこれからであるが，競争的外部資金の獲得状況も満足できる状況といえる。この 3 年間の著書以外の成果発表の状況としては，総説（和文）4 編，原著（和文）2 編，原著（欧文）1 編となっているが，分野の教員が第 1 著者になっている論文が少ないことが問題点としてあげられる。現在進行中の研究成果については，すでに学会発表を終えており，平成 21 年（2009 年）以降学術雑誌に投稿予定としている。

現状の問題点及びその対応策

競争的外部資金は平成 20 年度が最終年度であるため，平成 21 年度以降も継続して資金の獲得をして

いくことが課題となる。学外との共同研究においても，当分野が主導する形で行っていくことができていないことが問題点としてあげられ，論文発表も当分野の教員が第 1 著者となっているものが少ない。平成 21 年度以降は，第 1 著者として研究成果を論文投稿ことが課題である。

小児看護学教育の評価は，さまざまな角度から分析し，学会発表だけでなく教科書や教材という形で成果を発表していく必要があるとしていたが，教材として使用できる本の執筆にとどまっている。今後この本をどのように教育に活かしていくかということと，研究としてまとめるには倫理面や妥当性・信頼性などの問題点も多いが小児看護学の教育効果に関する研究を進める必要がある。

競争的外部資金で行ってきた，「岐阜地域で在宅療養をする小児の地域支援システムの構築」にはまだ課題も多く，今後どのように発展させていくかが課題であり，小児看護学の分野を越えたさまざまな分野との連携を強める必要を感じている。

今後の展望

平成 21 年度から大学院医学系研究科看護学専攻に小児看護学の修士課程が開かれる予定であり，入学生も選抜されている。今後は，大学院における院生の研究を含め，子どもと家族がより健康に生活できるような支援について研究を進めていく予定であり，研究成果の発表の機会も増えることが予測できる。看護教育は，教員が学生と関わる時間が非常に多いことが特徴である。また，看護研究は，実験室で行える研究がほとんどなく，子どもや家族との関わりをもつためのフィールドに出ることが重要となる。これらのことを踏まえ，子どもや家族と直接かかわるような学部生や院生への教育の質を落とさずに，フィールドに出て研究することに使用できる時間を確保することが課題であり，積極的に対応していきたい。

〔成人・老年看護学講座〕

（1）成人看護学分野（慢性期）

1. 研究の概要

臨床における看護の質の確保と向上のために臨床で得られた知の科学的分析，さらに慢性看護学の学問の確立と発展に貢献できるよう研究に取り組んできた。具体的には，治癒困難な慢性的な病を持ちながら長期間にわたり日常・社会生活を送らなければならない成人期にある患者の健康に関連した QOL（HRQOL）を問題とした HRQOL の維持，向上あるいは再構築に求められる看護の理論的探索とそれに基づく新たな理論の開発，難病に関する看護，代表的な慢性病である糖尿病患者の QOL の低下に最も関係する合併症予防に適用される最も望ましい看護の探求などである。そして，看護実践能力の育成のため慢性期分野臨地実習における教育内容の検討など慢性看護学の教育向上に関する研究も行っている。研究などで得られた成果は，看護教育や臨床の場に還元できるよう努力している。

2. 名簿

教授：	足立久子	Hisako Adachi
准教授：	福原隆子	Takako Fukuhara
助教：	伊藤育子	Ikuko Ito
助教：	恒川育代	Ikuyo Tsunekawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1）福原隆子．福井県立病院神経難病看護チーム；看護過程ガイダンス「ALS」，ナーシングカレッジ　2007 年；11 巻：46－63.

2）福原隆子．実習アセスメント･カード「神経・筋の疾患」，ナーシングカレッジ　2008 年；12 巻.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

1）足立久子．SF-36 を用いた糖尿病患者の健康状態評価，ヒューマン・ケア研究　2006 年；7 巻：11－19.

2）足立久子．外来通院中の糖尿病患者の HRQOL に与える健康評価の影響，日本看護科学学会誌　2006 年；26 巻：39－47.

3）恒川育代．2 型糖尿病患者の心筋梗塞および脳梗塞合併予防のための生活習慣と行動特性の検討，日本糖尿病教育・看護学会誌　2008 年；12 巻：4－16.

4）足立久子．糖尿病患者の HRQOL の評価に影響を与える要因の分析，日本看護科学学会誌　2008 年；28 巻：8－16.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1）研究代表者：野田洋子，研究分担者：小野敏子，足立久子；科学研究補助金基盤研究(C)：二分脊椎症女性の月経と性の健康に関する包括的ケアプログラムの開発；平成 18－20 年度；3,300 千円(1,500：800：1,000 千円)

2）研究代表者：伊藤育子；科学研究補助金若手研究(B)：日本人向けの糖尿病足病変予防のための看護プログラム作成とその有用性の検証；平成 19－21 年度；3,250 千円(1,000：1700：500 千円)

3）研究代表者：恒川育代；科学研究補助金若手研究(B)：男性 2 型糖尿病患者の心筋梗塞予防に向けたソーシャルサポートに関する研究；平成 20－22 年度；2,000 千円(600：600：800 千円)

2）受託研究

なし

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

足立久子：

1) 日本慢性看護学会評議員(～現在)
2) 日本看護研究学会評議員(～現在)
3) 日本ヒューマン・ケア心理学会理事(～現在)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

福原隆子：

1) 岐阜県准看護師試験委員・問題調整委員(平成19年～現在)

10. 報告書

1) 足立久子，TimeTrade-Off法による糖尿病患者の健康状態の評価に関する臨床的研究，平成15年度－平成17年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書：1－66(2006年3月)
2) 宮地裕文，福原隆子，建部早苗，竹内明美，石黒里美，廣部瞳，吉川典子：ALS・レスパイト入院患者受け入れ時の看護業務の検討－タイムスタディ調査をもとに－：平成18年度厚生労働科学研究費補助金，重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究報告書：55－60(2007年1月)

11. 報道

1) 足立久子：「研究室から　大学はいま」：岐阜新聞(2007年5月1日)
2) 福原隆子：市民公開講座－よりよい在宅介護を目指して：嶺南ケーブルテレビ RCN(放送日：2008年12月6，7，13，14，20，21，27，28日)

12. 自己評価

評価

慢性期分野としての共同研究の業績や各教員の著者や総説を含む論文などの業績が少ない。これまで，慢性期分野の授業内容の充実や方法の変更など慢性期看護学の教育の向上に力を注いできた。現在は，その成果を徐々にまとめ，発表の準備段階にある。

現状の問題点及びその対応策

問題点として，著書や発表論文などの業績が少ないこと，慢性期看護学の教育の向上に関する研究が現在行われていないことが挙げられる。対応策として，慢性期分野でこれまで行ってきた授業内容や方

法の充実などの教育に関する成果を共同で研究発表をしていくことである。

今後の展望
　分野の共同研究としての慢性期看護学の教育の向上に関する研究の実施，社会貢献などの業績を増やすよう努力したい。

（2）成人看護学分野（急性期）

1. 研究の概要

成人看護学急性期分野では，看護学教育・看護実践に活かすことを目的とした研究課題を設定し，教材開発や実態調査，実験/準実験等を行っている。研究の対象は，手術を受ける患者と家族や救急・クリティカルケアを必要とする患者と家族，リハビリテーションを必要とする患者と家族，スポーツ等の運動を行う者である。看護学教育に関しては，現在教員が開発したコンピュータ看護教材を CD や AIMS-Gifu の利用により自己学習する環境を整え，学生個々の自主的・主体的学習を支援している。これまでに，開発した教材「術後 24 時間の看護」，「手術室入室オリエンテーション」，「術後室の準備」，「麻酔導入までの看護」について教育効果の検証を行ってきたが，現在は「術前練習」「救急救命」に関する教材開発，作成した教材の学習効果の検証（客観的データに基づく評価研究）および教材の改良等へと研究を進めている。看護実践に関する研究では，術後患者の急性混乱・錯乱予防と早期発見のための看護を明らかにするための基礎研究を行ってきた。術後せん妄に関する日本語版スケール（NEECHAM Confusion Scale）の信頼性と妥当性の検討，および術後せん妄の発症過程と発症因子の分析に関するアルゴリズムの開発に取り組んでいる。また「スポーツ看護」という領域の意義を問うべく，競技スポーツ，障害者スポーツ，健康増進運動に関わる各種職種との協働の上での看護師の役割について実態調査を行っている。

2. 名簿

教授：	西本　裕	Yutaka Nishimoto
教授：	松田好美	Yoshimi Matsuda
准教授：	髙橋由起子	Yukiko Takahashi
助教：	梅村俊彰	Toshiaki Umemura

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1）西本 裕，大野貴敏．類骨骨腫，骨芽細胞腫：吉川秀樹編．最新整形外科学体系第 20 巻－骨・軟部腫瘍および関連疾患 2 章－骨腫瘍各論－，東京：中山書店；2007 年：201－205.
2）西本 裕，大野貴敏．非骨化性線維腫(線維性骨皮質欠損)：吉川秀樹編．最新整形外科学体系第 20 巻－骨・軟部腫瘍および関連疾患 2 章－骨腫瘍各論，東京：中山書店；2007 年：233－236.
3）竹内登美子．患者体験に学ぶ乳がんの看護：埼玉，すぴか書房；2007 年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

1）綿貫成明，酒井郁子，寺内英真．急性期病院におけるせん妄ケアの改善とシステム化　自分から変わる，今から変える「せん妄ケア」の考え方，看護管理　2007 年；17 巻：566－573.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

1）川﨑晴久，木村宏樹，伊藤　聡，西本　裕，林　浩之，栄枝裕文．手指リハビリテーション支援システムの研究(第 1 報，概念と 1 例試験報告)，日本機械学会論文集　2006 年；720－C：228－233.
2）小林輝之，田村哲嗣，速水悟，西本裕．インフォームド･コンセントのためのタブレット PC 利用システムの開発，医療情報学 26 回連合大会論文集　2006 年；577－578.
3）林雄二郎，田村哲嗣，速水悟，西本裕．デジタルペンと文字認識を用いた看護師メモ書き支援システムの開発，医療情報学 26 回連合大会論文集　2006 年；967－970.
4）永井寿弥，竹内登美子，矢野正子．パンフレット方式と CAI 方式による胃切除患者への食事指導の効果に関する比較研究，日本看護研究学会雑誌　2007 年；30 巻：23－30.
5）大島康司，三宅智，清水克時，大野貴敏，西本裕．骨原発血管肉腫の一剖検例　中部日本整形外科災害外科学会雑誌　2007 年；50 巻：463－464.
6）福田章二，大野貴敏，西本裕，清水克時．足背に発生した石灰化を伴った巨大な血管平滑筋腫の一例，中部日本整形外科災害外科学会雑誌　2007 年；50 巻：515－516.
7）永野昭仁，大野貴敏，西本裕，山田一成，清水克時．骨外性骨肉腫の 1 剖検例　中部日本整形外科災害外科学会雑誌　2007 年；50 巻：525－526.
8）大野貴敏，大島康司，清水克時，西本裕．人工骨を用いた良性骨腫瘍の術後成績，中部日本整形外科災害外科学会雑誌　2007 年；50 巻：627－628.

9) 横田治，大野貴敏，大野義幸，清水克時，西本裕，廣瀬善信，松永研吾．大腿軟部腫瘍の一例，東海骨軟部腫瘍　2007 年；19 巻：1－2.
10) 大島康司，斉藤満，大野義幸，清水克時，大野貴敏，西本裕，高見秀一郎，松永研吾，廣瀬善信．左殿部腫瘍の一例，東海骨軟部腫瘍　2007 年；19 巻：37－38.
11) 川﨑晴久，栄枝裕文，岩村真事，篠崎昌人，木村宏樹，西本裕，伊藤聡．バーチャルリアリティを応用した手指リハビリテーション支援システムの研究，VR 医学　2007 年；5 巻：32－39.
12) 西本裕，松田好美，本間千恵美，山賀寛，渡辺郁雄．競技スポーツにおける看護師の役割：国体選手などに対するアンケート調査による検討，岐阜大学医学部紀要　2008 年；9 巻：1－16.
13) 竹内登美子，松田好美，髙橋由起子，寺内英真，西本裕，小澤和弘，岡本恵里．臨床看護実践能力を高める Web 教材の選定と看護教育支援システムの構築に関する研究，岐阜大学医学部紀要　2008 年；9 巻：17－25.
14) 寺内英真，綿貫成明，竹内登美子，大沼扶久子，松田好美，髙橋由起子．診療記録からみた術後せん妄ケア・アルゴリズムの臨床的有用性の予備的検証，岐阜大学医学部紀要　2008 年；55 巻：26－31.
15) 松田好美，竹内登美子，寺内英真，髙橋由起子．日本語版 NEECHAM 混乱/錯乱状態状態スケールの有用性，岐阜大学医学部紀要　2008 年；55 巻：32－42.
16) 髙橋由起子，松田好美，竹内登美子，加藤直樹．AIMS－Gifu 学習支援システムによる確認テストを利用した術前指導用コンピュータ教材の学習効果，日本医療情報学会看護学術大会論文集　2008 年；9 巻：50－53.
17) 髙橋由起子，加藤直樹，松田好美．術前指導用コンピュータ教材の開発と技術演習の評価，岐阜大学カリキュラム開発研究　2008 年；25 巻：65－71.
18) 石榑康彦，川﨑晴久，西本裕，安倍基幸．手指上肢リハビリ支援システムの概要と今後の事業展開．ロボット，2008 年；185 巻：17－23.
19) 石丸大地，大野貴敏，小川寛恭，西本裕，清水克時．後頚部に発生した infantile fibromatosis の一例，中部日本整形外科災害外科学会雑誌　2008 年；51 巻：93－94.
20) 大野貴敏，大島康司，清水克時，西本裕．類骨骨腫に対する CT ガイド下ラジオ波焼灼術による低侵襲手術の経験，中部日本整形外科災害外科学会雑誌　2008 年；51 巻：913－914.

原著（欧文）

1) Futani H，Minamizaki T，Nishimoto Y，Abe S，Yabe H，Ueda T．Long-Term Follow-up After Limb Salvage in Skeletally Immature Children with a Primary Malignant Tumor of the Distal End of the Femur. J Bone Joint Surg Am. 2006;88:595-603.
2) Kawasaki H, Ito S, Ishigure Y, Nishimoto Y, Aoki T, Mouri T, Sakaeda H, Abe M. Development of Hand Motion Assist Robot for Rehabilitation Therapy by Patient Self-Motion Control. Proceedings of International Conference on Robot Rehabilitation. (ICORR2007), 234-240.
3) Mouri T, Kawasaki H, Nishimoto Y, Aoki T, Ishigure Y. Development of Robot Hand for Therapist Education/Training on Rehabilitation. Proceedings of the 2007 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2007), 2295-2300.
4) Mouri T, Kawasaki H, Aoki T, Nishimoto Y, Ito S, Ueki S. Tele-rehabilitation for Fingers and Hand. Proceedings of the 15th International Conference on Automatic Control. 2008,965-967.

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1) 研究代表者：松田好美，研究分担者：小倉真治，寺内英真，竹内登美子，髙橋由起子；科学研究補助金基盤研究(C)：救急看護における看護実践能力の向上を目的としたコンテンツ及び教材開発に関する研究；平成 17－18 年度；3,400 千円(2,200：1,200 千円)
2) 研究代表者：髙橋由起子，研究分担者：竹内登美子，松田好美，西本裕，加藤直樹；科学研究補助金基盤研究(C)(2)：臨床看護実践能力を高める術前指導用 Web 教材開発と E ラーニング活用による学習効果；平成 17－19 年度；2,200 千円(1200：500：500 千円)
3) 研究代表者：寺内英真；科学研究費補助金若手研究(B)：心臓血管外科領域の手術患者における術後せん妄発症予測に関する基礎的研究；平成 17－19 年度；2,500 千円(900：900：700 千円)
4) 研究代表者：松田好美：岐阜大学活性化経費(教育)：救急看護(学部授業科目)急性期看護方法 I (学部授業科目)救急医療と看護(大学院授業科目)；平成 19 年度；480 千円
5) 研究代表者：松田好美，研究分担者：寺内英真，竹内登美子，髙橋由起子；科学研究補助金基盤研究(C)：CAI 教材を利用した心肺蘇生法の知識・技術・実施への意思の保持・強化に関する研究；平成 19－21 年度；3,100 千円(2,000：600：500 千円)
6) 研究代表者：竹内登美子，研究分担者：松田好美，髙橋由起子，小澤和弘；科学研究補助金基盤研究(C)(2)：実践力の向上をめざした術後看護用コンピュータ教材の学習効果及び個人特性との関係；平成 18－20 年度；2,480 千円(1,000：780：700 千円)
7) 研究代表者：松田好美；岐阜大学活性化経費(教育)：救急看護(学部授業科目)急性期看護方法 I (学部

授業科目)救急医療と看護(大学院授業科目)生活・命と看護(全学共通教育)；平成20年度；470千円

8) 研究代表者：岡本恵里，研究分担者：竹内登美子，金澤寛明；文部科学省科学研究補助金基盤研究(C)：フィジカルアセスメント用PC教材の開発と活用及び看護技術演習による学習効果の検証；平成19－21年度；2,200千円(1,000：700：500千円)

2）受託研究

1) 研究代表者：藤江正克，川崎晴久，研究分担者：野田博，下村尚之，栄枝裕文，西本裕，安倍基幸：新エネルギー・産業技術総合開発機構　人間支援型ロボット実用化基盤技術開発事業，イメージトレーニング機能付き手指上肢リハビリ支援システムの研究開発；平成17－19年度；7,580千円(328：4,854：2,398千円)：丸富精工(株)

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

竹内登美子：

1) 日本看護研究学会評議員(平成19年度)
2) 日本看護科学学会評議員(平成20年度)

西本　裕：

1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
2) 日本整形外科学会代議員(～現在)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

竹内登美子：

1) 九州大学現代GPシンポジウム(平成18年11月，福岡，招待シンポジスト「医療系の教育におけるe-ラーニングの現状と未来」演者)
2) 第17回日本看護学教育学会学術集会(平成19年8月，福岡，学会招待講演「情報社会が問う看護基礎教育」演者)

西本　裕：

1) 西濃臨床整形外科医会(平成18年11月，大垣，教育研修講演「骨・軟部腫瘍治療のコツと落とし穴」演者)
2) 第115回備後整形外科医会(平成20年4月，福山，講演「骨・軟部腫瘍－診断から障害者スポーツまで－」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

西本　裕：

1) 岐阜県社会保険診療報酬請求書審査委員会審査委員(～現在)
2) 岐阜県体育協会医科学委員(平成19年～現在)

3) 岐阜労働局労災保険診療協議会委員(平成 20 年～現在)

松田好美：
1) 国際協力事業団(JICA)ウズベキスタン看護教育改善プロジェクトへ専門家として参加(～現在)
2) 社団法人岐阜県看護協会　岐阜県看護教員養成講習会講師(平成 19 年～平成 20 年)

竹内登美子：
1) 社団法人日本看護協会神戸研修センター　認定看護師教育課程講師(～平成 20 年)
2) 社団法人岐阜県看護協会　認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師(～平成 20 年)

10. 報告書

1) 竹内登美子，松田好美，髙橋由起子，村瀬康一郎，小澤和弘：臨床看護実践能力を高める Web 教材の開発と看護教育支援システムの構築に関する研究：平成15 年度－17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書：1－83(2006 年 3 月)
2) 松田好美，竹内登美子，髙橋由起子：術後せん妄の予防及び早期発見を目的とした日本語版 NCS の信頼性・妥当性の検証：平成14 年度－16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書：1－43(2006 年 3 月)
3) 松田好美：国際協力事業団(JICA)看護教育改善プロジェクト：看護教育改善プロジェクト(ウズベキスタン共和国，タシケント)専門家業務完了報告書(成人老年看護)：1－9(2006 年 9 月)
4) 松田好美：看護教育改善プロジェクト：看護教育改善プロジェクト(ウズベキスタン共和国，タシケント)専門家業務完了報告書(成人老年看護)：1－13，(その 2)1－2(2007 年 1 月)
5) 松田好美：国際協力事業団(JICA)看護教育改善プロジェクト：看護教育改善プロジェクト(ウズベキスタン共和国，タシケント)専門家業務完了報告書(成人老年看護)：1－4(2007 年 4 月)
6) 紀ノ定保臣，梅本敬夫，白鳥義宗，竹内登美子：次世代型電子カルテシステムによる診療工程・病院運営工程の統合分析環境の構築と解析，平成17 年度－18 年度文部科学省科学研究補助金成果報告書基盤研究(B)(2007 年 3 月)
7) 保住功，犬塚貴，田中優司，木村暁夫，高田知二，竹内登美子，岡本恵里：難病患者のニーズに適合した IT 機器の活用と心のケアに関するネットワークの構築，平成 17 年度－18 年度文部科学文部科学省科学研究補助金成果報告書 萌芽研究(2007 年 3 月)
8) 松田好美，小倉真治，寺内英真，竹内登美子，髙橋由起子：救急看護における看護実践能力の向上を目的としたコンテンツ及び教材開発に関する研究：平成17 年度－18 年度文部科学省科学研究補助金基盤研究(C) 研究成果報告書：1－61(2008 年 3 月)
9) 髙橋由起子，竹内登美子，松田好美，西本裕，加藤直樹：臨床看護実践揚力を高める術前指導用 Web 教材開発と E ラーニング活用による学習効果:平成 17 年度－19 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書：1－45(2008 年 3 月)
10) 松田好美：救急看護(学部授業科目)急性期看護方法 I (学部授業科目)救急医療と看護(大学院授業科目)：平成 19 年度岐阜大学活性化経費(教育)成果報告書：1－4(2008 年 12 月)

11. 報道

1) 西本裕：研究室から，大学はいま －大切な急性期のリハビリー：岐阜新聞(2006 年 6 月 20 日)
2) 竹内登美子：「乳がんの看護」出版 岐阜大医学部教授 患者の手記基に解説：岐阜新聞(2007 年 10 月 20 日)
3) 竹内登美子：ラジオインタビュー 乳がん：岐阜放送(2007 年 10 月 30 日)
4) 竹内登美子：乳がんの早期発見に役立てて：北日本新聞(2007 年 10 月 31 日)
5) 松田好美：研究室から，大学はいま －心肺蘇生法の教育に力－：岐阜新聞(2008 年 4 月 8 日)

12. 自己評価

評価

この 3 年間は各自がそれぞれ研究テーマを持ち，少ないながら研究資金を獲得し，分野全体で協力しながら研究を実践してきた。総合的評価としておおむね目標を達成できたと考えている。しかし，平成 20 年 3 月で 2 名の分野メンバーが移籍したため，新しいメンバーと共に研究活動の更なる展開を創造する必要がある。

現状の問題点及びその対応策

現在急性期看護分野メンバーは 4 名であるが，関心領域が多岐にわたっており，分野としての共通テーマに沿った研究活動が低迷している。各々の専門性を生かした共同研究を推進していく予定である。

今後の展望

コンピュータ教材の開発・改良，教育効果の検証を続行すると共に，各メンバーそれぞれの研究テーマでの活動を行っていく。各々の専門性を考えると新メンバーの一人は工学系に強くコンピュータ教材研究等の推進が期待できる。また，総合大学であること医学部に併設された看護学科であることの利点を生かし，他学部との共同研究を模索していく。特に医学研究科・附属病院，コンピュータ教材作成においては教育学部等との共同研究を推進していきたい。

（3）老年看護学分野

1. 研究の概要

老年看護学分野では，超高齢化時代に突入しつつある時代において，個人や家族の価値観の多様性を踏まえた高齢者の支援や健康の維持が重要な問題と考えている。

研究テーマとしては，「その人らしい生活の維持」への支援を基盤として「もてる力」を重視し，QOLを維持・向上するための方策に関する研究を行っている。

看護教育に関する研究としては，学生の実践応力の向上を意図し，とくにありのままの高齢者を理解し実践するための視点として，「もてる力」を意識的に観ることができるための方策としての臨地実習に関する研究を行っている。また，大学院に関する内容として，卒後継続教育における技術習得に関することや，看護教育制度に関する研究にも取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	箕浦とき子	Tokiko Minoura
准教授：	松波美紀	Miki Matsunami
助教：	温水理佳	Rika Nukumizu
助教：	吉川美保	Miho Yoshikawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1） 生野繁子，城ヶ端初子，箕浦とき子他．看護・介護のための基本から学ぶ高齢者ケア，京都：金芳堂；2006年：157－165，183－193.
2） 阿部芳江，関戸好子，箕浦とき子他．高齢者ケア「疑問すっきり」便利事典－在宅編－，京都：金芳堂；2006年：53－58.
3） 阿部芳江，箕浦とき子，松波美紀他．高齢者ケア「疑問すっきり」便利事典，京都：金芳堂；2006年：93－98，171－174.
4） 佐藤登美，箕浦とき子．看護学概論，東京：メディカルフレンド社；2006年：107－181.
5） 山村礎，勝野とわ子，箕浦とき子他．ナーシンググラフィカ　基礎看護学　基礎看護技術　第2版，東京：メディカ出版；2008年：438－441.
6） 大西和子，奥野茂代，箕浦とき子，高橋泰子他．老年看護技術，東京：ヌーベルヒロカワ；2008 年：36－41.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

1） 箕浦とき子，松波美紀，温水理佳，吉川美保．高齢患者さんへの対応とケア，プチナース　2006 年；15巻：35－49.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

1） 西山智春，大室律子，箕浦とき子他．看護学の教科書・参考書にみる「小児の食事援助」教育内容の分析，桐生短期大学紀要　2006年；17巻：203－207.
2） 松波美紀，箕浦とき子，温水理佳，吉川美保．高齢患者の“持てる力”の活用を強調した老年看護学実習の検討－実習記録の分析から－，老年看護学　2008年；12巻：60－67.
3） 松本幸枝，布施千草，箕浦とき子，唐沢泉，坂田五月，大室律子．在宅認知高齢者の急性期の入院における医療・介護支援体制の実態－介護家族のインタビューをとおして－，第38回日本看護学会論文集－地域看護－　2008年：70－72.
4） 坂田五月，大室律子，唐沢泉，布施千草，松本幸枝，箕浦とき子．新人看護職員の静脈注射技術の習得に影響を及ぼす要因，第38回日本看護学会論文集－看護管理－　2008年：71－73.

原著（欧文）

1） Muto Y, Yoshioka T, Kimura M, Matsunami M, Saya H, Okano Y. An evolutionarily conserved leucine-rich repeat protein CLERC is a sentrosomal protein required for spindle pole integrity. Cell Cycle. 2008;7:2738-2748. IF 3.314

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1） 研究代表者：温水理佳，文部科学省科学研究補助金若手研究(B)：認知症高齢者の QOL を高めるための被服行動への介入研究；平成 19－20 年度；2,400 千円(1,400：1,000 千円)

2）受託研究

なし

3）共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

箕浦とき子：

1） 日本老年行動科学会常任理事(～現在)

松波美紀：

1） 日本看護診断学会(～平成 19 年 7 月)

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

箕浦とき子：

1） 日本老年行動科学会誌(～現在)
2） 日本看護学教育会誌(平成 18 年 8 月～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

箕浦とき子：

1） 日本動物看護学会(平成 19 年 7 月，東京，招待講演「人医療に学ぶ－その進展経緯と職業観に学ぶ・家族看護学と動物看護学の接点を考える－」演者)
2） 日本看護学会　教育分科会(平成 20 年 7 月，岐阜，「現代若者の特徴を理解した看護教育」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

松波美紀：

1） 岐阜市認知症地域支援体制構築モデル事業　コーディネーター(平成 19 年度～平成 20 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

他大学の教員との研究，学内での共同研究は一部実施しているが，より多くの研究をすることが望ましいと考えている。また，老年看護学分野としての共同研究に関しても，まだまだ少ない状況にあるの

で，さらに充実させていく必要があると思われる。

現状の問題点及びその対応策

老年看護学分野の臨地実習は 4 年生が前期 2 単位，3 年生が後期 2 単位と，年間をとおして実習が行われている状況にあり，研究時間の獲得が困難な状況が継続している。そのため，前期の実習施設を 2 カ所から 4 カ所に増やし，1 ヶ月間の短縮を実施するに変更した。そのことを含め，研究成果に多少なりとも反映できるのではないかと期待している所である。

今後の展望

超高齢社会が目前に迫っている現在，高齢者自身に関することや介護に関することなど，医療・福祉における課題や，小・中学生を含む一般の人々の高齢者に関する啓蒙を図ることの必要性およびその方法についての研究を推進する必要があると考えている。また，認知症に関する対応も重要な課題であり，地域での連携をどのように推進していくかが課題として求められている。また，これまでの看護教育制度により老年看護学を学問として学んでいない医療従事者も多いことから，とくに看護職への啓蒙活動も実施し，加えて地域住民の方々への啓蒙も積極的に推進する必要性を感じている。

21 年度からは医学系研究科看護学専攻のカリキュラムが変更になり，地域健康援助学分野に「老年看護学」がもうけられることになっている。このことは，学部と大学院の教育内容の一貫性を図ることができることになり，より老年看護学に焦点化した研究を進めていけるのではないかと考えている。

〔地域・精神看護学講座〕

（1）地域看護学分野

1. 研究の概要

これまでと同様，当分野における基礎的，専門的研究はいずれも保健医療の分野である地域保健，産業保健，在宅看護，学校保健などの現場に立脚しているものであり，その成果は現場の活動に還元されるものが多い。また，これらの研究は，広く公衆衛生学及び看護学の内容とその研究手法に基づいて行われているものである。研究のテーマは，小児，青年，成人，高齢者など各年代にわたる人々を対象にしたものであり，例えば，少子高齢化の地域における育児に関する母親の自助グループや高齢者の健康増進に関する地域サポートシステム構築の過程や評価に関する研究などは，地域の特性に対応した公衆衛生看護学の理念に基づいた実践的な研究である。また，産業保健における健康管理に関する研究では，成人を中心とした年代における健康増進，健康障害予防など疫学的手法を用いた研究である。さらに，訪問看護における看護職の現状をリスクマネジメントの視点から行う研究は，訪問看護という新たな地域看護学分野における研究分野でもある。

このように地域看護学分野における研究は，あらゆる年代の人々を対象とした，健康増進，健康づくり，病気の予防と早斯発見・早期治療，社会復帰といった多様な分野における研究がなされており，今後も有益な実践的な研究活動を目指す。

＜主な研究テーマ＞

1）職域における健康管理に関する研究

化学物質による健康障害予防対策，化学物質以外の職業性疾病の予防対策，作業関連疾患等の予防対策の課題に取り組んでいる。

2）地域高齢者の閉じこもり予防に関する研究

高齢者はQOLの低下や環境条件などに伴い閉じこもり傾向がみられ，その結果介護を必要とする状態になるような場合も多い。地域における高齢者の閉じこもり予防のための支援策の実施とその有用性の検証を行っている。

3）保健師の活勤や配置に関する研究

主に市町村の保健師の役割と機能について，行政や社会の変化と対応してどのような現状であるか，どの様な役割や機能が期待されているか，適正な保健師の配置はどのようなものかといった研究を行っている。

4）訪問看護ステーションにおけるリスクマネジメント

訪問看護ステーションの看護職のリスクの現状と対処に関する研究を行い，訪問看護の質の向上に寄与することを目指して研究している。

2. 名簿

教授：	牧野茂徳	Shigenori Makino
教授：	後閑容子	Yoko Gokan
准教授：	石原多佳子	Takako Ishihara
助教：	玉置真理子	Mariko Tamaoki
助教：	纐纈朋弥	Tomomi Kouketsu

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1） 前川厚子，柳澤尚代　他．配食サーボビス従事者研修用テキスト，東京：中央法規；2006年：56－84.

2） 後閑容子．地域保健のキーワード，地域保健活動の歴史，健康教育，保健師の活動と倫理的問題：荒賀直子，後閑容子編著．第2版，地域看護学 第2版，東京：インターメデイカル；2007年：23－35，42－57，197－2017，430－436.

3） 柳澤尚代．ライフサイクルからみる地域看護活動，健康問題・課題と地域看護：福島道子編集．地域看護学Ⅱ(活動の展開)，東京：オーム社；2007年：1－29，68－69.

4） 石原多佳子．歯科保健活動，障害児(者)保健活動：荒賀直子，後閑容子編著，地域看護学　第2版，東京：インターメディカル；2007年：301－316，363－369.

5） 牧野茂徳　他．クエスチョン・バンク保健師国家試験問題解説 2009，東京：メディックメディア；2008年.

著書（欧文）
なし

総説（和文）
1） 後閑容子．在宅におけるホスピス・緩和ケア，臨床看護，2007 年；33 巻：707－711.
2） 荒賀直子，今井睦子，奥山則子，後閑容子，鈴木るり子，宮内清子．保健師教育の技術項目と卒業時の到達度(案)の提案，保健師ジャーナル，2007 年；63 巻：1000－1005.

総説（欧文）
なし

原著（和文）
1） 牧野茂徳．平成 17 年有所見率調査結果，東京さんぽ 21　2006 年；29 号：7－11.
2） 吉本照子，栁澤尚代．配食ボランティアの認識にもとづく高齢者の自立支援のしくみづくりの実態と課題，保健師ジャーナル　2006 年；62 巻：390－393.
3） 荒賀直子，後閑容子他．全国保健師教育機関協議会が作成した保健師教育試案，保健師ジャーナル　2006 年；62 巻：558－563.
4） 牧野茂徳，玉置真理子．企業規模による定期健康診断有所見率調査結果，岐阜医療科学大学紀要　2007 年；1 号：1－7.
5） 牧野茂徳．平成 18 年有所見率調査結果，東京さんぽ 21　2007 年；33 号：2－5.
6） 牧野茂徳．選別聴力検査の有所見率調査，日本職業・災害医学会会誌　2007 年；55 巻：20－28.
7） 栁澤尚代，吉本照子，波川京子他．中山間地の配食サービスにおけるボランティア活動者の問題認識と保健福祉の広報に対する期待，日本公衆衛生学会誌　2007 年；53 巻：890－899.
8） 牧野茂徳．平成 19 年有所見率調査結果，東京さんぽ 21　2008 年；37 号：2－5.

原著（欧文）
1） Makino S, Iwata H. Studies on prevention against disorders due to harmful chemical substances in the workplace by the scale of establishment. Acta Sch Med Univ Gifu. 2006;54:24-30.
2） Ishihara T，Tukuda Y，Saeki. K，Kido T. The meaning of “getting together”to older-elderly women in a mountainous community. Journal of Tsuruma Health Science Society. 2007;30:71-79.

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1） 研究代表者：玉置真理子；科学研究補助金若手研究(B)：幼児及びその保護者を対象にした喫煙防止教育方法の開発とその評価；平成 18－19 年度；2,600 千円(1,700：900 千円)
2） 研究代表者：村嶋幸代，分担研究者：後閑容子，石原多佳子；平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)特別養護老人ホームへの訪問看護の提供効果に関する研究；平成 19 年度；6,650 千円.
3） 研究代表者：石原多佳子，研究分担者：後閑容子，玉置真理子，石原敏秀；科学研究補助金萌芽研究：住民協働による学童期からの高齢者虐待一次予防プログラムの開発；平成 20－22 年度；3,200 千円(900：1,200：1,100 千円)
4） 研究代表者：玉置真理子；科学研究補助金若手研究(B)：地域保健活動のｱｳﾄｿｰｼﾝｸﾞが及ぼした行政保健師への影響；平成 20－22 年度；3,200 千円(1,300：1,000：900 千円)
5） 研究代表者：纐纈朋弥；科学研究補助金若手研究(スタートアップ)：産後の再喫煙防止を目的とした禁煙サポート方法の検討－夫の喫煙行動に焦点を当てて－；平成 20－21 年度；2,390 千円(1,340：1,050 千円)
6） 研究代表者：後閑容子，研究分担者：石原多佳子，玉置真理子；科学研究費補助金基盤研究(C)：行政変革時の保健師の役割再構築―transition 理論を用いた縦断的研究;平成 20 年度－22 年度;3,500 千円(1,300：700：1,500 千円)

2）受託研究
なし

3）共同研究
なし

5. 発明・特許出願状況
なし

6. 学会活動

1）学会役員

牧野茂徳：

1） 日本産業衛生学会代議員(～現在)
2） 日本産業衛生学会東海地方会理事(～現在)
3） 日本衛生学会評議員(～現在)
4） 日本民族衛生学会評議員(～現在)

後閑容子：

1） 日本民族衛生学会評議員(～現在)

玉置真理子：

1） 東海公衆衛生学会評議員(平成 18 年度～現在)

2）学会開催

牧野茂徳：

1） 平成 18 年度日本産業衛生学会東海地方会学会(2006 年 11 月，岐阜)

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

牧野茂徳：

1） 平成 18 年度日本産業衛生学会東海地方会(2006 年 11 月，岐阜，特別講演「地域保健と職域保健の連携」座長)
2） 日本遠隔医療学会学術大会(2008 年 10 月，岐阜，シンポジウム「特定健診・特定保健指導」演者)

後閑容子：

1） 第 66 回日本公衆衛生学会総会(2007 年 10 月，愛媛，フォーラム 4「保健師教育の臨地実習と卒後教育」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

牧野茂徳：

1） 「ヘルスプランぎふ 21」推進会議委員(～現在)
2） 「ヘルスプランぎふ 21」推進会議地域・職域連携推進部会委員(平成 18 年度～現在)

後閑容子：

1） 岐阜県看護協会認定看護師制度セカンドレベル教育課程運営委員会委員長(平成 18 年度～現在)
2） 全国保健師教育機関協議会副会長(～現在)

柳澤尚代：

1） 保健師記録に関する自治体のアドバイサー(～現在)

石原多佳子：

1） 岐阜市介護認定審査委員(～現在)
2） NPO 法人ぎふ福祉サービス利用者センターびーすけっと理事(～現在)
3） 岐阜県立陽光園経営委員(～現在)

10. 報告書

1） 後閑容子，石原多佳子：特別養護老人ホームへの訪問看護の提供効果に関する研究：研究代表者，

村嶋幸代，平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)複数の訪問看護ステーションによる地域単位の 24 時間訪問介護・看護の効果的・効率的な実施方法の開発研究　分担報告：129－246(2008 年 3 月)

11. 報道

1) 柳澤尚代：地域住民と健康づくり図る：岐阜新聞(2006 年 8 月 29 日)
2) 石原多佳子：訪問看護充実へ体制探る：岐阜新聞(2008 年 12 月 16 日)

12. 自己評価

評価

看護学科の運営にかかわる諸活動，地域看護学分野に関連する教育活動に中心をおいて，充実した活動ができたと評価する。これらの教育活動には，各研究者の研究活動の成果が反映されていると考えられる。特に，地域看護学では，産業保健，地域保健，在宅看護などの関連分野における実践者との共同研究がなされていることは評価に値する。

現状の問題点及びその対応策

教育活動としては，平成 21 年度教育課程の改訂がなされたので，新しい教育課程における地域看護学および在宅看護学の教育活動，特に実習の充実がさらに必要と考えられる。今後さらに，地域看護学分野における教育の充実を図ることが課題である。

地域看護学，産業保健分野に関連する研究活動としては，実践と遊離しない研究活動が重要であると考えられるので，研究フィールドの拡充に努めたい。

今後の展望

教員各自の研究テーマを持つことと共に，分野における共通した研究課題をもち，研究活動を活発化することを展望の一つに挙げる。

(2) 精神看護学分野

1. 研究の概要

精神看護学は，社会におけるメンタルヘルスについての諸問題および個々の健康障害を持つ人々に対する看護アプローチの方法を探究する分野であると考えている。こころの働きと日常生活との関連に焦点を当てた精神看護の視点から，こころの健康，健康障害について考察するとともに，心身を病む人々への精神看護学の概念モデルおよび方法論，技術論の実証的な研究を目指している。また，地域におけるメンタルヘルスケアシステムの検討，ノーマライゼーションの理念の元に精神障害者の理解の促進，および精神障害者へのサポートに関する検討を行っていくことを研究分野としている。

＜主な研究テーマ＞

1）精神科デイケア・作業所に通所中の精神障害者の現状に関する研究

ノーマライゼーションの理念のもと，多くの精神障害者が社会に戻り共に生活するようになってきている．精神科デイケアに通所している精神障害者の社会生活の現状について，参加観察法と面接法によってその体験を理解し，社会の中での彼らへの支援について検討している。

2）精神障害者の回復過程における治療的なかかわりに関する研究

精神科病院に入院している患者に対し，治療的な環境としてどのような看護師のかかわりが必要か検討している。急性期から慢性期のあらゆる病期の精神障害の体験世界について，生活の実態と彼らの現実認識とのずれから，精神機能の障害が生活や対人関係の能力に及ぼす影響を検証し，そこでの関わりの意味を明確にしていく課題に取り組んでいる。

3）大学生のストレスに関する研究

現代はストレス社会と言われ，多くの人がさまざまなストレスを抱えて生活をしている。大学生も例外ではなく，ストレスを処理できず，こころを病む学生が多くなっている。現代の大学生のストレス状況とそれに影響する要因について，多方面から検討を行っている。

4）精神看護における看護師のコミュニケーション技術の分析に関する研究

コミュニケーションは精神看護を行う上で非常に重要な看護技術の一つである。しかし，視覚的確認のできない技術であるため，客観的評価がしづらく，各個人の特性に大きな影響を受けるものである。看護師のコミュニケーション技術の実態と技術に影響を及ぼす要因について検討を行っている。

5）精神科デイケアの通所初期段階における利用継続要因に関する研究

精神障害者の治療基盤が，「精神病院から地域へ」という流れがつくられ，退院後に精神科デイケアで行われる治療的アプローチが益々重要となってきている。デイケア継続に影響する要因を明確にしていくことによって，継続を決定づける時期のアプローチを確立していく課題に取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	奥村太志	Hutoshi Okumura
准教授：	杉浦浩子	Hiroko Sugiura
助教：	三品弘司	Hiroshi Mishina

3. 研究成果の発表

著書（和文）

1）奥村太志．精神障害者の理解と看護に関する研究，東京：雄松出版；2008年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

1）杉浦春雄，杉浦浩子．Voluntary running exercise is associated with enhanced macrophage and lymphocyte cytokine in young mice，健康レクリエーション研究会雑誌　2006年；3巻：11－21.

2）杉浦春雄，杉浦浩子，植屋摩紀，植屋悦男．Chronic exercise associated with enhanced macrophage and lymphocyte cytokine production in young mice，総合福祉　2006年；3巻：9－18.

3）杉浦浩子，竹内麻乃，杉浦春雄．ストレス反応および対人恐怖心性が大学生のソーシャルスキルに及ぼす

影響，健康レクリエーション研究会雑誌　2007年；4号：5－14.
4）杉浦浩子，杉浦文香，杉浦春雄．親の養育態度が大学生のソーシャルスキルに及ぼす影響，健康レクリエーション研究会雑誌　2007年；4号：15－27.
5）渋谷菜穂子，奥村太志，小笠原昭彦．看護師を対象としたRathus Assertiveness Schedule日本版の作成，日本看護研究学会誌　2007年；30巻：79－88.
6）奥村太志，杉浦浩子，三品弘司．陽性症状のある統合失調症患者への精神療法的対応，日本精神科看護学会　第13回　急性期精神科看護学会誌　2007年：33－37.
7）乙村優，奥村太志，細野容子．うつ病患者の回復過程の理解と看護についての考察－他者に気を遣いすぎる傾向に変化をもたらした入院体験－，日本精神科看護学会　第13回　精神科リハビリテーション看護学会誌　2007年：34－38.
8）奥村太志，杉浦浩子，三品弘司．精神科病院に長期入院するという体験と看護についての検討，日本精神科看護学会　第14回　老年期精神科看護学会誌　2007年：76－80.
9）岡崎敏朗，杉浦浩子，井上眞人，杉浦春雄．レクリエーション支援技量が気分変容に与える影響　－～ジャンケンゲーム支援の技量差の違いが及ぼす影響について－，日本健康医学会雑誌　2008年：16巻；21－27.
10）杉浦浩子，宇田桃子，杉浦春雄．大学生を対象としたストレス反応の高低による認知的評価の差異の検討，健康レクリエーション研究会雑誌　2008年；5号：19－24.
11）杉浦浩子，長屋恵，杉浦春雄．大学生のインターネット上の友人関係とサポート期待の実態およびストレスの高低による比較，健康レクリエーション研究会雑誌　2008年；5号：25－34.
12）乙村優，奥村太志，杉浦浩子．自己批判的な女性うつ病患者の入院体験と看護の検討－参加観察法と半構成的面接法による内容の分析から－，日本精神科看護学会　第15回　専門学会Ⅱ学会誌　2008；11－15.

原著（欧文）
なし

4. 研究費獲得状況

1）競争的資金

1）代表者：杉浦浩子；岐阜大学活性化経費(地域連携)：飛騨地域における看護研究支援プロジェクト；平成19年度；400千円
2）代表者：杉浦浩子，研究分担者：奥村太志，三品弘司：科学研究費補助金(萌芽研究)；精神看護におけるメッセージの受信・処理技能に関する研究；平成20－22年度；1,500千円(700：300：500千円)

2）受託研究

なし

3）共同研究

1）代表者：原田宜久(㈱ニデック)，研究分担者：小池高弘，西野博志，種田行男，杉浦春雄，井上眞人，杉浦浩子，他：小規模事業者新事業全国展開新事業；がまごおりマリン・アンチエイジング推進事業：平成18年度；9,000千円

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1）学会役員

なし

2）学会開催

なし

3）学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

1） 杉浦浩子，杉浦春雄，井上眞人：マリンアクティビティのストレス軽減およびリラクゼーション効果に関する研究，平成18年度小規模事業者新事業全国展開支援事業，がまごおりマリン・アンチエイジング推進事業成果報告書：1－81(2007年)

11. 報道

1） 奥村太志：理論と実践をつなぐ検討会：岐阜新聞(2007年12月11日)

12. 自己評価

評価

半期に渡る臨床実習指導を抱え，研究活動に十分な時間を割くことができない状況にはあるが，少しでも研究活動が行えるように時間的・業務的調整を行い，研究に取り組んできた。一部ではあるが，専門誌への投稿や著書として公表し，一定の成果をあげてきている。また，少額ではあるが研究費も確保することができ，研究体制は整いつつある。しかし，分野として目指すところはより実践的な研究であり，さらなる研究フィールドの確保や協力体制を構築する必要がある。現在はその基盤作りとして，臨床看護師および他大学と協同して事例検討会や精神看護に関する学習会を行っており，徐々に拡がりを見せてきている。

現状の問題点及びその対応策

人員が少ないこと，教育に投じる時間が多いことにより，研究時間の確保が難しい状況にある。現在は，個々に時間を調整して研究を進めていることが多いため，今後は効率性と研究の質を高めることを考え，分野全体としての研究課題を持ち，研究体制の調整を図りたい。

今後の展望

現在行っている臨床や他大学との共同学習会を今後も継続し，臨床との共同研究へと発展させていきたい。